

『一夜碧巖』第四則訳注

土屋 太祐

凡例は「『一夜碧巖』第一則訳注」（『東洋文化研究所紀要』第一六七冊、二〇一五）に準ずる。また第四則より、原文のあきらかな誤字・脱字・衍字は本文部分で校訂し、削除すべき字を（ ）、追加、訂正後の字を「」で示す。

『一夜碧巖』第四則「徳山挾復問答」

【本則】

拳。徳山到瀉山。〔担板漢。／野狐精。〕

挾復子，於法堂上〔納敗缺。／不妨令人疑着。〕

從西過東辺，從東過西辺，〔可殺有禪。／作广？／点。〕

顧示云：「無，無」，便出。〔好与三十棒。／大煞氣衝牛斗。／真師子兒善師子吼。〕

師着語云：「勘破了也。」〔錯。／点。／果然。〕

徳山至門首，却云：「也不得草圍。」〔放去解取來。／頭上太高生，末後太低生。／知過必改，能有幾人。〕
便具威儀，再入相見。〔依前作這個去就。／已是第二重納敗缺。／又云：「嶮。」〕

鴻山坐次，〔冷眼看人。／着也，這老漢。／須是這般底始得。〕

徳山提起坐具，云：「和尚。」〔改頭換面。／無風起浪。〕

鴻山擬取扠子。〔須是那漢始得。／大宗師家。／不妨坐斷天下人舌頭。〕

徳山便喝，扠袖而出。〔野狐精見解。／一種拏云〔攫〕霧，草偃風行，就中奇特。／這一喝也有照，也有用。〕

師着語云：「勘破了也。」〔錯。／点。／果然。〕

徳山背却法堂，着草鞋便行。〔風光可愛。／公案已円。／已是喪身失命。〕

鴻山至晚問首座：「適來新到，在什广処？」〔東边落節，西边拔本。／眼觀東南，意在西北。〕

首座云：「当時背却法堂，着草鞋出去也。」〔靈龜曳尾。／好与三十棒。／這老漢〔惱〕〔腦〕上合喫多少。〕

鴻山云：「此子，已後向孤峰頂上盤結草庵，呵仏罵祖去在。」〔賊過後張弓。／天下衲僧跳不出。〕

師着語云：「雪上加霜。」〔錯。／点。／果然。〕

〔訓読〕

挙す。徳山、鴻山に到る。〔担板漢。／野狐精。〕

複子を挟み、法堂上に於いて〔敗缺を納む。／不妨だ人をして疑着せしむ。〕

西より東辺へ過ぎ、東より西辺へ過ぎ、〔可殺だ禪有り。／作广。／点。〕

顧示して、「無、無」と云いて、便ち出ず。「三十棒を与うるに好し。／大煞だ氣、牛斗を衝く。／真の師子児は師子吼を善くす。」

師、着語して云く、「勘破し了れり。」〔錯てり。／点。／果然して。〕

徳山、門首に至りて却つて云く、「也た草草なるを得ず。」〔放去し、解く収来す。／頭上は太だ高生く、末後は太だ低生し。／過ちを知りて必ず改むるは、能く幾人か有らん。〕

便ち威儀を具え、再び入りて相見す。「依前として這个の去就を作す。／已に是れ第二重の納敗缺なり。／又た云く、「嶮うし。〕

鴻山坐する次、「冷眼に人を見る。／着たれり、這の老漢。／須是らく這般き底にして始めて得し。〕

徳山、坐具を提起して、云く、「和尚。」〔頭を改め面を換う。／風無きに浪を起こす。〕

鴻山、扨子を取らんと擬するに、「須是らく那の漢にして始めて得し。／大宗師家。／不妨だ天下人の舌頭を坐断す。〕

徳山便ち喝し、袖を払い出ず。「野狐精の見解。／一種じく云を祭り霧を攫み、草偃し風行くも、就中奇特なり。〕

／這の一喝、也た照有り、也た用有り。〕

師、着語して云く、「勘破し了れり。」〔錯てり。／点。／果然して。〕

徳山、法堂に背却けて、草鞋を着けて便ち行く。「風光愛すべし。／公案已に円かなり。／已是に喪身失命せり。〕

鴻山、晩に至りて首座に問う、「適来の新到、什麼処にか在る。」〔東辺に落節し、西辺に抜本す。／眼は東南を観、意は西北に在り。〕

首座云く、「当時、法堂に背却けて、草鞋を着けて出で去れり。」〔靈亀尾を曳く。／三十棒を与うるに好し。／這の

老漢、腦上、合まはに多少をか喫すべき。」

滄山云く、「此この子、已おと後、孤峰頂上に向おいて草庵を盤結し、仏を呵のし祖のしを罵り去ぞらん在。」〔賊過ぎし後、弓を張る。／天下の衲僧、跳び出だせす。〕

師、着語して云く、「雪上に霜を加う。」〔錯あやてり。／点。／果然はたして。〕

〔日記〕

本則の提起。徳山が滄山に來た。「この石頭。／狐つき。」

風呂敷包みを抱えたまま、法堂を〔負けだ。／なんとも思わせぶり。〕

西から東へ、東から西へと歩きまわり、「たいそうな禅機で。／それからどうする。／見破った。」

見わたして、「いない、いない」と言うと、そのまま出て行つた。「三十棒ものだ。／ずいぶんな威勢だな。／これはおみことな獅子吼。」

雪竇の著語、「見破ったぞ。」〔違う。／ここだ。／思った通り。〕

しかし門のあたりまで來ると、「とはいえ、いい加減にするのもよくない」と言つて、「緩ゆるめたかと思えば、また引き締める。／はじめは高すぎ、こんどは低すぎ。／よくぞ心を入れ替えた。」

身なりを整え、再び入つて滄山にお目通りした。「相も変わらず。／二度目の負けだ。／あぶない。」
滄山が坐つていると、「冷静沈着。／ほれぶつかつたぞ、このオヤジめ。／こうでなくては。」

徳山は坐具を持ち上げ、一言、「和尚。」〔まるで別人。／無用の波風。〕

瀧山が扨子を取ろうとするや、「このオトコならでは。／さすがは本格の師家。／誰にも有無を言わせぬ手並み。」
徳山はたちまち一喝し、袖を払って出て行つた。「狐つきのやり口。／空を飛び去り、人はひれ伏す。そのなかでも、ひとときわ素晴らしい。／言うことなしの一喝。」

雪竇の著語、「見破つたぞ。」〔違う。／ここだ。／思った通り。〕

徳山は法堂に背を向け、わらじを履いてそのまま立ち去ってしまった。「ほれほれする姿。／公案はこれで完結。／とうに死んでおる。」

晩になり、瀧山は首座に問うた。「先ほどの新入りはどこか。」〔アチラの負けをコチラで取り返す。／狙いは別にあ
る。〕

首座いわく、「あのまま法堂に背を向け、わらじを履いて出て行つてしまいました。」〔跡が残つてしまつておる。／
三十棒ものだ。／このオトコ、後ろから打つてやればよい。〕

瀧山いわく、「こやつ、こののち、何者も寄せつけぬ山頂に草庵を構え、仏祖を罵ることだろうよ。」〔あとの祭り。
／ここから逃げおせる者はおらぬ。〕

雪竇の著語、「余計なうわのせ。」〔違う。／ここだ。／思った通り。〕

【注釈】【本則】

○この則には示衆が附されない。張本第四則の垂示は一夜本で第三則に附される。

○この問答は『祖堂集』巻一六・瀧山章、『景德伝灯録』巻一五・徳山章、『宗門統要集』巻七・徳山章、『宗門披露

集』巻上・徳山章、『祖源通録撮要』巻三・徳山章などに出る。このうち『祖堂集』に載せるものは極めて簡潔で、ほぼ本則「徳山扶複問答」の一度目の相見の部分に相当する。『雪竇頌古』本則は『景德伝灯録』に近い。景德伝灯録研究会編『景德伝灯録』五、禅文化研究所、二〇一三、四四八頁参照。また『景德伝灯録』巻一六・巖頭章には、「徳山扶複問答」の後半と類似した問答が、仰山と巖頭のものとして記録されている（『景德伝灯録』、禅文化研究所、一九九〇（以下、禅文研本）、三〇七頁上）。あるいは伝承の過程で混乱を生じたか。『景德伝灯録』巻一六・巖頭章、「……乃ち仰山に謁ゆ。纒かに門に入るに坐具を提起して曰く、『和尚。』仰山、扨子を取りて之を拏さんと擬するに、師曰く、『不妨好手なり。』（禅文研本、三〇七頁上）。

○挟複子Ⅱ「複子」は風呂敷包み。徳山は通常の作法に従わず、旅装を解かず包みを抱えたまま法堂に上がった。ただし、『雪竇頌古』より前の文献に「複子を挟み」という表現は見られない。『臨濟録』示衆、「大策子上に死老漢の語を抄し、三重五重に複子もて裹み、人をして見しめず、是れ玄旨なりと道いて、以て保重を為す。」（岩波文庫、一九八九、一二一頁）。『林間録』巻上、「（夾山善会）因つて下座して問うて曰く、『上座の適笑うは、何事を笑うや。』道吾曰く、『和尚の一等に行脚するも、複子を放きて所在に著たらざるを笑う。』（乙一四八・五八八下）。

○法堂Ⅱ住持の説法する堂。禅院における中心的な建築物。『景德伝灯録』巻六・百文章「禅門規式」には、「仏殿を立てず、唯だ法堂を樹つるは、仏祖の親しく囑受して当代を尊と為すことを表すなり」（禅文研本、一〇一頁上）と言う。ただしこの規定がどれほど実行されたかは不明。道忠『禅林象器箋』殿堂類・仏殿の項、および法堂の項（柳田聖山主編『禅学叢書』之九、中文出版社、一九七九、五一頁下および五六頁下）参照。

○従西過東辺、従東過西辺Ⅱ張本では「従東過西、従西過東」に作る。一夜本は『雪竇頌古』に一致する。

○顧示云：「無、無」便出。振り返り見て、「たいした禪者はいない」と言うと、さっさと出て行ってしまった（景德伝灯録研究会編『景德伝灯録』五、四四八頁参照）。「示」は「視」に通ず。『雪竇頌古』、張本は「視」に作る。

○師着語云：「勘破了也。」。雪竇の著語、「見破つたぞ。」徳山の禅風については衣川賢次「徳山と臨済」、『東洋文化研究所紀要』一五八冊、二〇一〇参照。「師」、張本は「雪竇」とする。一夜本は『雪竇頌古』に一致する。

○也不得草^葺。そうは言ってもおろそかにすることはできない。下の「草」字、底本で破損。『雪竇頌古』等により補う。

○徳山提起坐具、云：「和尚。」。坐具を提起す」とは、これから坐具を広げ、その上で礼拝しようとするしぐさ。しかし、徳山は坐具を開かぬうちに、瀉山の反応を試した。賛寧『大宋僧史略』卷上・礼儀沿革、「昔、梵僧此に到るに、皆な尼師壇（坐具）を展舒し、上に就きて礼を作す。」（丁五四・二三八下）。『景德伝灯録』卷一四・僊天和尚章、「新羅僧到り参す。方に坐具を展じて礼拝せんと擬するに、師捉住て云く、『未だ本国を発せざる時、一句を道取せよ。』其の僧、語無し。師便ち推し出して云く、『伊に一句を問いしに、則ち両句を道えり。』（禅文研本、二八四頁下。景德伝灯録研究会編『景德伝灯録』五、四三八—四三九頁参照）。

○瀉山擬取扠子。瀉山はスキを見せることなく、すかさず扠子を立てて対応した。瀉山はしばしばこの方法を用いたようで、人々はこれを「色に即して心を明し、物に附きて理を顕す」と理解していた。ただし、そのような知的理解が、以下の例ですべて退けられている点には注意を要する。『景德伝灯録』卷一一・香巖章、「師、僧に問う、『什麼^ず処よりか来る。』僧曰く、『瀉山より来る。』師曰く、『和尚近日何の言句か有る。』僧曰く、『人、如何なるか是れ西

来意」と問うに、和尚、扨子を竖起す。」師、挙するを聞きて、乃ち曰く、『彼中の兄弟、作麼にか和尚の意旨を会する。』僧曰く、『彼中に商量して道く、「色に即して心を明し、物に附きて理を顕す」と。』師曰く、『会せば即ち便に会すも、会せざれば什麼の死急をか著けん。』僧却つて問う、『師の意は如何』師、還た扨子を挙ぐ。』（禪文研本、一八〇—一八一頁。入矢義高監修、景德伝灯録研究会編『景德伝灯録』四、禪文化研究所、一九九七、二二四—二二五頁参照）。同卷一〇・甘贄行者章、「又た一僧に問う、『什麼処よりか来る。』僧云く、『瀉山より来る。』甘云く、『曾て僧有りて瀉山に問う、「如何なるか是れ西来意」、瀉山扨子を举起す。上座、作麼生にか瀉山の意を会する。』僧云く、『事に借りて心を明し、物に附きて理を顕す。』甘云く、『且く瀉山に帰り去るが好し。』』（禪文研本、一五九頁下。入矢監修、景德伝灯録研究会編『景德伝灯録』四、一二〇頁参照）。

○徳山便喝、扨袖而出。徳山は、瀉山の反応にさらに先回りして一喝し、さつさと出て行つた。

○此子、已後向孤峰頂上盤結草庵、呵仏罵祖去在。この男はこの後、本来性一本やりの立場に立って、仏も祖も否定し続けるだろう。「孤峰頂」はしばしば、現実性から隔絶した絶対の本来性を喻える。『景德伝灯録』では、「向孤峰頂上」以下の語はここに見えず、徳山の師、龍潭が徳山を評したことはに出る。【本則評唱一】参照。『臨濟録』上堂、「一人は孤峰頂上に在りて、出身の路無く、一人は十字街頭に在りて、亦た向背無し。那箇か前に在り、那箇か後に在る。維摩詰と作さざれ、傳大士と作さざれ。珍重。」（岩波文庫本、二二六—二七頁）。『汝州首山念和尚語録』、「問う、『和尚は是れ大善知識なるに、什麼の爲にか却つて山に首たる。』師云く、『孤峰頂に坐せず、常に白雲を伴いて閑か。』」（『古尊宿語要』卷二、柳田聖山主編『禅学叢書』之一、中文出版社、一九七三、六四頁上）。

○雪上加霜。同じものを重ねる。無意味なうわのせ。瀉山はここで徳山が本来性一本やりであることを批判している

が、そんなことは言わずもがなだ。『景德伝灯録』卷一九・雲門章、「師上堂して云く、『諸和尚子、饒たどい你なんじ、什麼なにごと事ことか有りありと道いうも、猶なほお是れ頭上に頭を著つけ、雪上に霜を加え、棺木裏に眼みを根みり、炙瘡盤上に艾わを著つけて焦こがす。……』」（禪文研本、三八四頁上）。同卷二一・龍華彦球章、「問う、『如何なるか是れ学人の自己。』師曰く、『雪上、更に霜を加う。』」（禪文研本、四二六頁下）。

【注釈】【著語】

○担板漢 〓「担板漢」は板を担いでいるために片側しか見えない者、見方の偏った者。徳山が瀉山に到ったことをとらえ、あちこち行脚すること自体が一種の執着であるとす。『景德伝灯録』卷一〇・趙州章、「新到僧參ず。師問う、『什麼い処ずよりか来る。』僧云く、『南方より来る。』師云く、『仏法は尽く南方に在り。汝は這裏ここに來りて什麼なにをか作す。』僧云く、『仏法に豈に南北有らんや。』師云く、『饒たどい汝、雪峰・雲居よ従り来るも、只だ是れ箇の担板漢なり。』」（禪文研本、一五五頁上）。『禪林僧宝伝』卷一九・西余端章、「章公は仙を学ぶを好み、呂公は坐禅を好み、徐六は板を担うを喻たとしむも、各自一辺を見るのみ。』（柳田聖山・椎名宏雄共編『禪学典籍叢刊』第五卷、臨川書店、二〇〇〇、五三頁下。以上二例について、入矢監修、景德伝灯録研究会編『景德伝灯録』四、七七―七八頁参照）。

○野狐精 〓「野狐精」はキツネの妖怪、あるいはそれに取りつかれたもの。得るべき仏法があると思つて諸方を行脚するなど、キツネつきの所行だ。『臨濟録』示衆、「道流、諸方に説く、道の修すべき有り、法の証すべき有りと。你说え、何の法をか証し、何の道をか修せん。你が今の用處ゆうじよ、什麼物なにものをか欠少かんじようし、何の処をか修補せん。後生の小阿師え会あせずして、便すなわ即ち這般かくのごとき野狐精魅を信じ、他かれの事ことを説ときて他人を繫縛けいばくし、理行相応し三業を護惜して始めて成

仏するを得と言道うことを許す。」(岩波文庫本、七九―八〇頁)。

○納敗缺〓敗北する、失敗する。法堂に上がった時点で負けだ。『圓悟語録』卷一〇「曾先生請小參」、「若し是れ箇の曹溪門下の客ならば、直に解脫の処に到りて、更に落二落三せず。未だ拳覚せざる已前に、早是に落二落三し了れり。何ぞ況んや拳覚言證するは、総て敗闕を納む。」(T四七・七五九中)。

○不妨令人疑着〓奇異な行動をしていぶかしがらせる。旅装も解かず法堂に上がって、いったい何をするつもりか。

四卷本『大慧普說』卷二「方外道友普說」、「無尺問うて曰く、『柏樹子上に在ること莫しや。』曰く、『甚の交渉か有らん。』又た問う、『拳起する処に在ること莫しや。』曰く、『甚の交渉か有らん。』也た不妨だ人をして疑著せしむるも、子細に之を詰うに及びては、渠云く、『柏樹子上に在らざれば、乃ち顧視する処に在り。之を「拳して顧みざれば即ち差互う」と謂う。』無尺大笑し、……」(柳田聖山・椎名宏雄共編『禪学典籍叢刊』第四卷、臨川書店、二〇〇〇、二〇八頁下)。「破菴祖先禪師語録」、「者の風顛漢、不妨だ人をして疑著せしむるも、人に窮詰られ將ち来るに及至びては、却って只だ箇の羅扇打供を道い得るのみ。」(Z二二一・八三七上)。

○可殺有禪〓『種電鈔』等では、下の「作什麼」とつなげて一つの著語とするが、本稿ではそれぞれ単独のものとする。たいそう禅機のあることで。徳山の思わせぶりな行動を揶揄する。『從容録』第一六則・本則著語、「拳す、麻谷、錫を持して章敬に到る。禅床を遶ること三匝、錫を振るうこと一下し、卓然として立つ。〔可曬だ禅有り。〕」(禅文化研究所、一九九二、二八頁下)。

○作广〓張本に「作什麼」に作る。なにをする。法堂を歩き回り、それでどうするつもりだ。

○点〓張本に無し。「点破」の意か。徳山が法堂上を歩き回った真意は見破ったぞ。下の「点」の注釈を参照。

○好与三十棒 〓 挨拶もせず、「たいした禅者はいない」などと無礼なことを言うとは、三十棒ものだ。

○大煞氣衝牛斗 〓 張本に「可煞氣衝天」に作る。気が天にまでとどく。徳山ときたら、たいそうな氣勢だ。「牛斗」は牛宿と斗宿。『晋書』張華伝によれば、晋が呉を滅ぼそうとしていた時期、牛宿と斗宿の間に常に紫の気が見られたが、これは宝剑の精気が天に届いたものであったという（中華書局、一九七四、一〇七五頁）。

○真師子兒善師子吼 〓 徳山が「無、無」と言ったことを「まったくごりつばな獅子吼だ」と皮肉る。語は『景德伝灯録』卷九・東邑懷政章に出る（禅文研本、一四五頁上）。

○錯 〓 以下、雪竇の三つの著語すべてに、「錯。点。果然」という圓悟の著語が付けられる。岩波文庫『碧巖録』（岩波書店、一九九二—一九九六、上七六—七八頁）、『現代語訳碧巖録』（岩波書店、二〇〇一—二〇〇三、上八〇—八二頁）はひと続きの著語として解釈するが、一夜本と張本で順序が異なり、本来はそれぞれ独立した三つの著語であったとわかる。

「錯」は「間違いだ」の意。ただし、雪竇の見かたが過ちだと言うのではなく、雪竇の著語「勘破し了れり」を、徳山を勘破したのか、それとも瀉山を勘破したのかと、二者択一的に理解しないよう、視点を反転するもの（『本則評唱二』「雖然在両辺、却不住両辺」の条を参照）。『碧巖録』第三一則・本則の雪竇著語に範をとったものか。張本『碧巖録』第三一則・本則、「麻谷、錫しゃくを持って章敬しょうけいに到る。禅床ぜんじょうを遶めぐること三匝、錫しゃくを振ること三匝、卓然として立つ。敬云く、『是ぜなり、是ぜなり。』雪竇著語して云く、『錯。』麻谷又た南泉なんせんに到る。禅床ぜんじょうを遶めぐること三匝、錫しゃくを振るること一下し、卓然として立つ。泉云く、『不是ひつじなり、不是ひつじなり。』雪竇著語して云く、『錯。』同本則評唱、「他の問は既に一般おなじなるに、為な什麼ゆえにか一箇ひとりは是と道い、一箇は不是と道う。若し是れ通方の作者にして、大解脱おほれを得たる

底の人ならば、必須かならずや別に生涯有るべし。若し是れ機境忘れざる底ならば、決定して這の両頭に滞在らん。若し古今を明辨し、天下人の舌頭を坐断せんと要せば、須すべはらく這の両錯を明取して始めて得し。後頭あとに及至およんで、雪寶の頰まも也た只だ這の両錯を頰す。雪寶は活鱗鱖の処を提せんと要す。所以に此かくの如し。……慶藏けいざう主道すいどうく『錫せきを持して禅床を遶る、是と不是と俱に錯あやまりてり。其の實、亦た此こゝに在らず。』爾見なんじずや、永嘉、曹溪に到りて六祖に見まゆ……此箇これも也た是と説いわず、也た不是と説いわず。是と不是と都すて是れ繫驢けいろう楸。唯だ雪寶有りて両錯を下すは、猶なお些せ子しに較なえり。』(T四八・一七〇上—下)。

○点てん 〓 『不二鈔』、「点てんは、他かれを検けんす、他を破はす(或本に、檢、破の上に皆な点の字有り)。」(禪文化研究所、一九九三、四四頁上)。これに従したがえば、「点てん」は「点破」「点檢」の意。雪寶の「勘破かんぱし了りれり」を言い換かえ、「こことだ」と言いつたもの。『景德伝灯録』卷二一・宝寿章、「師曰く、『向後このち、多口おほくちの阿師有りて汝なが与よに点破てんぱせん在ぞ。』」(禪文研本、二二九頁上)。

○果然こゝろ 〓 はたしてこう来た。徳山のやりようは思おもっていた通りだ。雪寶の立場から、その氣持きぢちを代た弁べんする。

○放はな去し解げ収しゆ来らい 〓 「解げ」、張本ちやうほんに無し。自由じゆうにさせたと思おもつたら、引ひき締しめることもできる。放はなは相手あいてに自由じゆうに振ふる舞まわせること、収しゆは相手あいての立場たて場ばを奪うばい、自由じゆうにさせないこと。「放行はうぎやう／把住ばしゆ」とは異なる概念がいねんで、もつぱら問答もんたうにおける禪師ぜんじの態度たいどを評ひやうする語ごである。ここでは、徳山とくざんが「いない、いない」と言いつて出でて行いつたことを「放はな」、「いい加減かげんにするのもよくない」といいつて引ひきかえし、再びまた滄山そうざんと問答もんたうしたことを「収しゆ」とする。張本ちやうほん『碧巖録』第六八則・頌しゆ評唱へいしやう、「『双収しゆうしゆし双放しゆうはうするは若いかん為がが宗しゆなる』。放行はうぎやうして互たがひに賓主ひんしゆと為なる。仰山やうざん云いく、『汝なの名なは何なん麼ぞ。』聖せい云いく、『我が名なは惠寂ゑじやく。』是れ双収しゆうしゆなり(「収しゆ」は張本ちやうほんに「放はな」に作る。福本ふくほん、一夜本いちやほんに従したがつて改あらためる)。仰山やうざん云いく、『惠寂ゑじやくは是れ

我。』聖云く、『我が名は惠然。』是れ双放なり（「放」、張本に「収」に作る。福本、一夜本に従って改める）。其の実は是れ互換の機。収むれば則ち大家収め、放たば則ち大家放つ。雪竇一時に頌し尽くし了れり。他の意に道く、『若し放収せず。若し互換せずんば、爾は是れ爾、我は是れ我ならん。』都来て只だ四箇の字、甚に因つてか却つて裏頭に於いて出沒卷舒する。（T四八・一九八中）。張本『碧巖録』第七五則・本則評唱、「其の僧便ち出ず」は是れ双放。已下は是れ双収、之を互換と謂うなり。（T四八・二〇三上）。『明覚禪師語録』卷三「拈古」、「拏す、臨済示衆して云く、『我、先師の処に於いて三度、六十棒を喫するに、蒿の枝子の払うが如くに相い似たり。如今、一頓棒を喫せんことを思う。誰か為に手を下す。』僧、衆を出でて云く、『某甲、手を下す。』済、棒を拈じて僧に与う。僧、接らんと擬するに、便ち打つ。師云く、『臨済、放つ処は較危うきも、収め来るは太だ速し。』（T四七・六八六上）。土屋太祐「血脈不斷・相続也大難」宋代禪宗における公案解釈の一視点、『印度学仏教学研究』第六七卷第二号、二〇一九参照。

○頭上太高生、末後太低生ははじめは非常に高踏的だが、後ろはたいへん卑俗だ。徳山は、はじめ空に徹した態度で超然としていたが、そのあとはずいぶん俗っぽい方に出た。「太高生」は第一義に徹して人の理解を寄せ付けなさいさま。第三則【頌】【著語】の注釈を参照。「頭上」「末後」は時間上のはじめとおわり。

○知過必改、能有幾人は自分の間違いを知り改めた徳山は立派だ。徳山が引き返したことを茶化す。

○依前作這个去就は相変わらずこういうことをする。二度目の相見であることを言う。「依前」は相変らず、なおも。「去就」は行い、振る舞い。

○已是第二重納敗缺はすでに二度目の敗北だ。この前に「挟複子、於法堂上」に対して「納敗缺」と著語したことを

踏まえて言うか。

○又云：「嶮。」〓「又云」、張本に無し。あぶないぞ。再び法堂に上がれば、瀉山にやり込められるかもしれない。

【頌評唱二 参照。

○冷眼看人〓冷静に相手を見る。瀉山は徳山の様子を冷静に観察している。この箇所の子の著語、「冷眼看人。〓着也、這老漢。〓須是這般底始得」、張本では「冷眼看這老漢。〓掙虎鬚、也須是這般人始得」に作り、このとおり二つの著語として理解されることが多い。張本と一夜本の著語にはしばしば順序や語句の違いがみられるが、往々にしてそれぞれ対応する部分、あるいは増加・減少した部分を特定することができる。このことは、『碧巖録』の著語が圓悟による三回の提唱に由来し、それがまとめられる過程でテキストごとの違いが生じたことを推測させる。では、この箇所の著語の対応関係はどうなっているだろうか。張本の著語は、上記のとおり二つに分けて理解されることが多いが、このままでは両者の対応関係がわかりづらい。いっぽう『不二鈔』は「這老漢掙虎鬚」を一句として解釈している。そこで本稿では、張本の著語は本来、「冷眼看。〓這老漢掙虎鬚也。〓須是這般人始得」の三語より成り、一夜本の三つの著語とそれぞれ対応していると推測する。

○着也、這老漢〓張本「這老漢掙虎鬚也」に相当する。「着」はあたる、(悪いことに実際に)遭遇する。徳山が法堂に入っていくと、ちょうど瀉山が坐っているところであった。徳山は手ごわい相手に行き会ってしまったぞ。あるいはひとつ前の著語「又た云く、『嶮うし』」に対応するか。「這老漢」は徳山を指す。『一夜碧巖』第六八則・本則著語、「僧云く、『師の頭落ちたり。』」(着たれり。)(大拙校訂本、下五三頁)。『一夜碧巖』第五四則・頌著語、「却って問う、知らず何ぞ太だ險なる。(闍黎相次と着たれり。)(大拙校訂本、下二二頁)。

○須是這般底始得〓張本「須是這般人始得」に相当する。このようではなくてはならぬ。泰然自若とした瀉山を称賛する。

○改頭換面〓様相を変える、面目を一新する。ときに輪廻して生まれ変わることを喩える。しばしば本質はそのまゝに表面だけを変えるというニュアンスを持つ。ここでは、徳山がそれまでのやり方を変え、瀉山を礼拝する姿勢を見せたことを茶化する。『寒山詩』、「畏るべし輪廻の苦、往復して塵を翻すが似し。蟻、巡環して未だ息まず、六道乱れて紛紛たり。頭を改め面孔を換うるも、旧時の人を離れず。」(項楚『寒山詩注』、中華書局、二〇〇〇、五四五―五四八頁)。『圓悟心要』卷下「示琛上人」、「但し一則の公案上に透頂透底し、信得及して無疑の地に到らば、餽問つかのまに千種万端に改頭換面する長句短句、多句少句、有句無句を一時に透脱す。豈あに兩種有らんや。」(Z二二〇・七五九)。

○無風起浪〓なにもないところに波風を立てる。理由もなく悶着を起す。徳山の礼拝は、無用な騒動を引き起こすものだ。『一夜碧巖』第一八則・本則評唱、「帝、一日師に問う、『百年の後、須もとむる所は何物なんぞ。』只だ是れ平常なる一句の話なるに、這この老漢、風無きに浪を起こし、却かえつて道ちう、『老僧の与たまに今の無縫塔を作れ』と。」(大拙校訂本、上八四頁)。

○須是那漢始得〓やはりこのオトコでなくてはならない。瀉山の手並みを称える。

○大宗師家〓張本に「大宗師家」無く、「運籌帷幄之中」とする。瀉山は本格的の師家である。張本『碧巖録』第七〇則・本則評唱、「古人いむ道ちく、『平地上に死人無数、荊棘林を過得する者は是れ好手』と。所以ゆえに宗師家は荊棘林を以て人を駢あす。何故ぞ。若し常情の句下に於いてせば、人を駢し得ず。」(T四八・一九九中)。『一夜碧巖』第六七則・本則評唱、「殊に知らず、宗師家の説話は、情量、意識、法塵、分別を絶し、正位に入り来りては一法をも存せず。」

(大拙校訂本、下五一頁)。

○不妨坐斷天下人舌頭 天下の人々に有無を言わせない。【本則評唱三】に「瀉山、若し天下人の舌頭を坐斷する底の脚手無き時には、它を驗すことも也た大いに難し」とする。当該の注釈を参照。

○野狐精見解 徳山が一喝して立ち去ったことを、妄念に染まった見解だ、キツネつきのやり口だと揶揄する。『圓悟語録』卷一二、「(青原行) 思、弘子を拈起して問うて云く、『曹溪に還た這箇有りや。』而今、兄弟、人に恁麼く問われるれば、便ち喝を下し語を下し、野狐精の見解にして、張眉弩眼して強いて主宰と作る。総て交渉没し。』(T四七・七六七下)。

○一種拏云(攫)「攫」霧、草偃風行、就中奇特 葛藤を断ち切り、人々に有無を言わせないというやり方のなかでも、徳山は特に優れている。張本に「二等是拏雲攫霧者、就中奇特」に作る。「云」は「雲」の古字。「攫」は底本に「攫」にするが、大拙校訂本に従い改める。「拏雲攫霧」は龍門を超えた魚が龍となり、天高く飛び去るさま。葛藤を断ち切り透脱することの喩え。「草偃風行」は接化に対して人々が従うさま。張本『碧巖録』第六〇則・頌、「尾を焼く者も雲を拏み霧を攫むに在らず。腮を曝す者も何ぞ必ずしも胆を喪い魂を亡わん。」同頌評唱、「魚、禹門を過ぐれば、自ら天火有りて其の尾を焼き、雲を拏み霧を攫みて去る。」(T四八・一九二下—一九三上)。「一夜碧巖」第四八則・頌評唱、「明招道い得て也た大いに奇特なるも、争奈せん未だ雲を拏み霧を攫む底の爪牙有らず。」(大拙校訂本、上二〇三頁)。「圓悟語録」卷一七、「徳山は大いに金輪聖王に似て、寰中に独拠し、四方八表、順従せざる無し。等閑に一勅を布き一令を施さば、直に草偃風行するを得。」(T四七・七九一中)。

○這一喝也有照、也有用 張本に「這一喝也有权、也有実、也有照、也有用」に作る。「用」は棒や喝など、接化の

作略。「照」は普遍的な觀照のはたらきを指すか。徳山の喝は、一つの意味に止まらない。普遍的な仏法としての意味も、個別的な接化の意味もある。張本『碧巖録』第二〇則・本則評唱、「他の古人の一言一句は乱りに施為せず、前後相い照らし、権有り実有り、照有り用有り、賓主歴然として、互換縦横す。」(丁四八・一六一上)。「圓悟語録」卷一一、「小參。目前に一法無く、森羅方法は歴然たり。格外に千機を立つれば、権実照用廓爾たり。……其の照らすや、沙界を廓周して餘すこと無く、其の用うるや、喝は雷の奔るに似て、棒は雨の点るが如し。」(丁四七・七六一下)。

○風光可愛＝徳山の風格はすばらしい。

○公案已円＝張本に「公案未円。／贏得頂上笠、失却脚下鞋。」に作る。「贏得頂上笠、失却脚下鞋」に相当する部分は一夜本に無し。この公案はこれで完結している。残りの部分は蛇足だ。張本の字を取れば、公案はまだ終わっていないぞ、まだ続きがあるぞという注意。

○已是喪身失命＝「喪身失命」は命を落とす、失敗する。真理から逸脱することを諭える。徳山は素早く立ち去つて、何ものにもとらわれぬ姿を見せたつもりかもしれないが、既に第二義に落ちてゐる。「風光可愛」「公案已円」が徳山に対して肯定的であるのにくらべ、これは否定的である。『一夜碧巖』第三〇則・本則評唱、「若し是れ特達英靈の漢ならば、直下に撃石火裏、閃電光中に向いて、才かに拏着するを聞かば、眉毛を剔起して便ち行く。苟或し佇思停機せば、喪身失命を免れず。」(大拙校訂本、上一三七頁)。「圓悟心要」卷下「示従大師」、「所以に道く、他の得たる底の人は、只守だ閑閑地たるのみ。且く道え、他は箇の甚の道理をか得る。若し針鋒許の有無得失、我見我解有らば、則ち命根を刺却す。須らく知るべし、猛火聚の如くにして、之に近づかば則ち面門を燒却す。金剛劍の如くし

て、之を擬さば則ち喪身失命す。」(Z一二〇・七六二下)。

○東日落節、西辺抜本Ⅱアチラで損した分を、コチラで取り返す。徳山との問答が失敗に終わった分を、首座との問答で取り返そうとしている。「落節」は損をすること。「抜本」は負けた分を取り返すこと。『李陵変文』、「其の時匈奴落節し、漢に便宜を輸け、直に黄昏に至るも、兵を収め了せず。」(項楚『敦煌変文選注(増訂本)』、中華書局、二〇〇六、一六八四頁)。「法演禪師語録」、「昨日、那裏に落節す。今日、者裏に抜本せん。」(T四七・六五三中)。「大慧普覚禪師語録」、「殊に知らず、孚上座は正に是れ一枚の賊漢にして、鼓山の面前に於いて一場の敗鬪を納れ、慄慄として帰るに、却って雪峰の処に來りて抜本す。」(T四七・八四〇下)。

○眼観東南、意在西北Ⅱ眼は東南を見ているが、狙いは西北にある。徳山の居所を尋ねながら、実は首座を試そうとしている。

○靈龜曳尾Ⅱ靈龜が泥の中で尾を曳くと、足跡は消えるが、尾の跡が残ってしまう。一つの価値を否定しながら、否定の痕跡が新たな価値として残ることを喩える。徳山は瀉山に目もくれず、さっさと立ち去ったが、こんどは「立ち去った」ことがはっきりと残っている。「祖庭事苑」巻五「靈龜曳尾」条、「凡そ龜の行は、常に尾を曳きて以て其の迹を掃うも、而して尾の迹は猶お存せり。莊子の所謂る吾は將に尾を塗中に曳かんとすなり。」(Z一一三・一三八下)。「一夜碧巖」第八七則・本則評唱、「三十一人は言を以て言を遣り、文殊は無言を以て言を遣る。一時に掃蕩して要せず、是を不二法門と為す。知らず、靈龜曳尾にして、掃帚を用つて塵を掃うが似くなるを。塵は去り已れり」と雖も、掃いし迹は猶お在り。最後に依前として蹤跡を除きて始めて得し。」(大拙校訂本、下)。

○好与三十棒Ⅱこれ見よがしに立ち去る徳山は三十棒ものだ。

○這老漢（惱）「腦」上合喫多少〓張本に「這般漢腦後合喫多少」に作る。立ち去る徳山の後ろから棒を食らわせてやればよかつたのだ。

○賊過後張弓〓徳山が去つた後に何を言つても後の祭りだ。『宗門統要集』巻七・徳山章に、本則と同様の話頭に対し五祖師戒（嗣法の次第は、雲門文偃―双泉師寛―師戒。生没年未詳）が附した次の拈古が見える。「徳山、大いに似たり、賊を作す人、心虚ろなるに。馮山は也た是れ賊過ぎし後に弓を張る。」（柳田聖山・椎名宏雄共編『禪学典籍叢刊』第一巻、臨川書店、一九九九、一六二頁上）。

○天下衲僧跳不出〓この問題と無関係なものは一人もない。徳山のみならず、すべての禅僧にとつて「呵仏罵祖」という否定一辺倒の枠から出ることは難しい。徳山を評した馮山の一句を、自分の問題として受け止めなければならぬ、という聴衆への注意喚起。【本則評唱四】参照。語は『碧巖録』第三三則・頌に出る。

【本則評唱一】

復拳徳山語畢。夾山只道三个点字，諸人還會么？ 有時將一茎草作丈六金身，有時將丈六金身作一茎草。

徳山本是講人，在川中講《金剛經》，説：「經中道，金剛喻定，後得智中，千劫学仏威儀，万劫学仏化行，然後成仏。它南方魔子便道：『即心是仏。』」遂發憤，檐疏抄直往南方，破滅者魔子輩。看它恁么，也做个猛利漢。

遂到澧州龍潭，便問：「久響龍潭，到來潭也不見，龍也不現。」潭云：「子親到龍潭。」被龍潭將無限黑水便茶糊。它答云：「子親到龍潭。」

〔訓読〕

復た徳山の語を拳し畢る。夾山は只だ三個の「点」字を道えり。諸人還た会すや。有る時は一茎草を將つて丈六の金身と作し、有る時は丈六の金身を將つて一茎草と作す。

徳山は本と是れ講人なりて、川中に在りて『金剛經』を講ず。説く、「經中に、金剛喻定、後得智の中に、千劫、仏の威儀を学び、万劫、仏の化行を学びて、然る後に成仏すと道えるに、它の南方の魔子は便ち、『即心是仏』と道う」と。遂に発憤して、疏抄を檐いて直に南方に往き、者の魔子輩を破滅せんとす。看よ、它の恁麼きは、也た个の猛利漢做り。

遂に澧州の龍潭に到り、便ち問う、「久しく龍潭を響いしに、到り来らば潭も也た見えず、龍も也た現れず。」潭、云く、「子、親しく龍潭に到れり。」龍潭に無限の黒水を將つて便ち茶糊せらる。它、答えて云く、「子、親しく龍潭に到れり。」

〔日訳〕

(もう一度、徳山の言葉を紹介し終る。) わしは、三たび「点」の著語をつけたが、さて分かるか。ある時は一本の草を仏となし、あるときは仏を一本の草とする、というものだ。

徳山はもともと教学の僧で、四川で『金剛經』を講じておったが、あるときこう思った。「經に言うところでは、修行の最後の金剛喻定で煩惱を断ち、後得智のうちで、千劫のあいだ仏の立ち居振る舞いを学び、万劫のあいだ仏の教化を学び、それでやっと成仏できる。しかるに例の南方の邪師ときたら、『即心是仏』などと言っているではない

か。」そこで意を決し、『金剛經』の疏鈔を担いで南方へと向かい、この邪師どもを論破しようとしたのである。これもまた、なかなか勇猛なことではないか。

かくて澧州の龍潭禪院に到り、こう問うた、「長いあいだ龍潭禪師をお慕い申し上げておりましたが、やれ来てみれば、潭も見えませんか、龍も現れませんか。」龍潭いわく、「そなた、それでこそ身をもって龍潭に来たというものだ。」龍潭も、たいへんな泥水で目を眩ませたものだ。

〔注釈〕

○復拳徳山語畢 〓この句、張本に無し。もう一度、徳山の言葉を紹介し終わった。この一句は圓悟の行為を示すト書きで、圓悟自身の発言ではない。実際にいかなる言葉を挙げたかは不明。

○夾山只道三个点字、諸人還會 〓「只道」は張本に「下」に作る。夾山は圓悟の自称。『碧巖録』に附す関友無党の後序によれば、圓悟は成都、澧州夾山靈泉禪院、潭州長沙道林寺の三か所で『雪竇頌古』の提唱を行っており、この一文は夾山靈泉院での提唱に由来する。「三个点字」は、本則中に挿入される雪竇の三つの著語につけた圓悟の著語「点」を指す。

○將一茎草作丈六金身、有時將丈六金身作一茎草 〓「丈六金身」は仏の身体を言う。仏という極めて価値の高いものと一茎の草という取るに足らないものを自在に入れ替える働き。雪竇の著語は、徳山を勘破したものの、もしくは瀉山を勘破したものと理解できるが、一つの意味に特定して理解してはならない。『趙州録』巻上、「師上堂して云く、『此の事は明珠の掌に在るが如し。胡来らば胡現れ、漢来らば漢現る。老僧は一枝の草を把て丈六金身の用を作し、

丈六金身を把て一枝の草の用を作す。仏即ち是れ煩惱、煩惱即ち是れ仏。」問う、「仏は誰人の与にか煩惱と為る。」師云く、「一切人の与に煩惱と為る。」云く、「如何が免れ得る。」師云く、「免るるを用いて作麼ん。」（『古尊宿語要』卷一、柳田聖山主編『禪学叢書』之一、中文出版社、一九七三、三四頁上）。

○徳山本是講人、在川中講《金剛經》。徳山は『宋高僧伝』『景德伝灯録』で劍南の人、『祖堂集』で劍南西川の人とする。いずれも現在の四川省成都市を中心とする地域。戒律や教理学に精通し、『金剛般若経』を講じた。『景德伝灯録』卷一五・徳山章、「卅歳にて出家し、年に依りて受具す。律藏を精究し、性・相の諸経に於いて旨趣に貫通す。常に『金剛般若』を講じ、時に之を周金剛と謂う。」（禪文研本、二八七頁上）。『祖庭事苑』卷五「窮諸玄辯」条、『徳山広録』に云く、『師は長に『金剛經』を講ず……』（Z一・一三・一四七上）。

○説：「経中道、金剛喻定、後得智中、千劫学仏威儀、万劫学仏化行、然後成仏。它南方魔子使道：『即心是仏。』」
 Ⅱ「説経」の二字は、張本で「因教」に作る。この内容は『碧巖録』より前の伝記資料に見られない。「金剛喻定」は修行の最終段階で入る禅定で、ここで一切の煩惱を断つ。「後得智」は平等の真如を悟る「根本智」の後に得る智慧で、これにより現象界の差別相を分別する。「化行」は教化の活動、張本には「細行」とする。「金剛喻定」以下の句は、もと『菩薩瓔珞本業経』卷上・聖賢学観品（T二四・一〇二下—一〇三上）に出るもので、成仏までの修行の長さを喩える成句として定着していたようである。窺基『成唯識論述記』卷九、「且く『瓔珞経』の如きは云く、『百劫に千の三昧を修し、千劫に仏の威儀を学び、万劫に成仏を化現し大寂定に入る。是れ等覚菩薩なり』と。三大劫満ち已わるを言う。」（T四三・五五八上）。『大慧語録』卷一八「孫通判請普説」、「往往にして士大夫は、只だ知んぬ、所謂、仏は千劫に威儀を学び、万劫に相好を修し、乃至三大阿僧祇劫に修して而る後に成ず……」（T四

七・八八八上)。「即心是仏」は馬祖道一の思想の要諦として有名であるが(小川隆『語録の思想史—中国禪の研究』、岩波書店、二〇一一、四五—五五頁参照)、ここでは頓悟を主張する禪宗の一般的な立場を示す。

○遂発憤、檐疏抄直往南方、破滅者魔子輩。看它恁广、也做个猛利漢。〓「檐」は「担」に通ず。徳山は禪宗の頓悟の主張に憤り、これを論破しようと、『金剛経』の注釈書を担いで南方へと行脚に出た。『祖堂集』『宋高僧伝』『景德伝灯録』には類似の記述を見ないが、『祖庭事苑』に以下のようにあり、『碧巖録』もこれらにもとづいたものと思われる。『祖庭事苑』巻五「窮諸玄辯」条、『徳山広録』に云く、『……南方に禪宗大いに興るを聞き、疏鈔を將ち衣を巻きて南游す。……』(Z一一三・一四七上)。同巻七「徳山」条、「南方に禪宗大いに興るを聞きて、其の由を測らず。因つて衆を散じ、経を負いて南游す。」(Z一一三・二二二上)。

○遂到澧州龍潭。澧州は現湖南省澧県。張本では、龍潭に到る前の逸話として、油糍あげもちを売る老婆との問答が挿入される。この逸話も、他の伝記資料には見られない。張本『碧巖録』第四則・本則評唱、「初め澧州れいしゅうに到る。路上に一婆子の油糍あげもちを売るを見て、遂に疏鈔を放下して、且く点心を買いて喫くらわんとす。婆あば云く、『載のする所の者は是れ什麼なんぞ。』徳山云く、『『金剛経』の疏鈔なり。』婆云く、『我に一問有り、爾なんじ若し答え得ば、油糍を布施して点心と作なさん。若し答え得ざれば、別所に買かい去され。』徳山云く、『但だ問え。』婆云く、『『金剛経』に云く、「過去心不可得、現在心不可得、未來心不可得」と。上座、那箇いずれの心をか点ぜんと欲する。』山、語無し。婆、遂に指令して去ゆきて龍潭に参ぜしむ。』(T四八・一四三頁下)。

○便問：「久響龍潭、到來潭也不見、龍也不現。」潭云：「子親到龍潭。」被龍潭將無限黑水便茶糊。它答云：「子親到龍潭。」〓「長い間龍潭をお慕い申し上げましたが、実際に来てみると、龍も潭も見えません。大したことはありません。

せんな。「それでこそ身をもつて龍潭に來たというものだ。」何の奇特も無いところが龍潭の仏法である(景德伝灯録研究会編『景德伝灯録』五、三四〇—三四一頁参照)。これに対して圓悟は、たいへんな汚れ水で目をくらまされたものだ、と抑下する。「何も無いところが龍潭の仏法だ」という意識もまた、人を縛り付ける固定觀念となる。【本則】に見える通り、徳山の禪風が捨遣一辺倒であることを念頭に置いたもの。「黒水」は「悪水」と同様、人を縛り付ける觀念のこと。「茶糊」はそのような觀念を塗りたくり、眼をつぶすこと。それぞれ第一則【本則評唱二】【本則評唱六】を参照。最後の「它答云：「子親到龍潭。」は行文か。また張本ではこの後に以下の徳山大悟の因縁が述べられる。張本『碧巖録』第四則・本則評唱、「夜間に至りて入室し侍立す。更深くして潭云く、『何ぞ下がり去らざる。』山、遂に珍重して簾を掲げて出ず。外面の黒きを見て却回して云く、『門外黒し。』潭、遂に紙燭を点して山に度与す。山、方に接らんとするに、潭便ち吹滅す。山、豁然として大悟し、便ち礼拝す。潭云く、『子箇の什麼を見てか便ち礼拝する。』山云く、『某甲、今自り後、更に天下の老和尚の舌頭を疑著せず。』來日に至り、潭、上堂して云く、『可中に箇の漢有りて、牙は劍樹の如く、口は血盆に似、一棒もて打するも頭を回らさず。他時異日、孤峰頂上に向いて、吾が道を立て去らん在。』山、遂に疏鈔を取り、法堂の前に於いて、火炬を將つて拳起して云く、『諸の玄辯を窮むるも、一毫を太虚に置くが若く、世の枢機を竭くすも、一滴を巨壑に投ずるに似たり。』遂に之を焼く。』(T四八・一四三下)。

【本則評唱二】

後來聞瀉山盛化，直造。既至瀉山，便作家相見，亦不得解包，直上法堂，從西過東，從東過西，顧示云：「無，

無」，便出。且道是顛？是狂？是什广？人多錯會，用作（見）「建」立。且沒交涉。看它恁广，不妨奇特。所以道：「驚群須是英靈漢，敵聖還它師子兒。」到這裏，須是通方作者始見得。何故？仏法無許多事，那裏得个情見來？它是心機泯絕，那裏有許多般煨糟？所以玄沙道：「直似秋潭月影，靜夜鐘聲，隨扣擊以無虧，觸波瀾而不散，此猶是生死岸頭事。」到這裏，亦無得失，亦無是非，亦無奇特，亦無玄妙。既無奇特玄妙，得失是非，作广生會它從西過東，從東過西？且道意作广生？

瀉山老漢也不管。若不是瀉山，被它折挫一上。看它瀉山老作家，只管坐看成敗。若不深辯來風，爭能如此？雪豆着一語云：「勘破了也」，一似鉄橛子相似。衆中謂之着語。雖然在兩辺，却不住兩辺。作广生會它道：「勘破了也」？什广處是勘破處？且道勘破德山？勘破瀉山？

〔訓読〕

後來、瀉山の化を盛んにするを聞き、直に造る。既に瀉山に至れば、便ち作家相見す。亦た包を解くを得ずして、直に法堂に上がり、西より東に過ぎ、東より西に過ぎ、顧示して、「無、無」と云いて、便ち出ず。且く道え、是れ頭か、是れ狂か、是れ什麼ぞ。人多く錯り会して、用つて建立と作す。且く沒交涉。看よ它的恁麼きは、不妨に奇特なり。所以に道く、「群を驚ろかすは須らく是れ英靈漢なるべし。聖に敵するは它的師子兒に還す」と。這裏に到りては、須らく是れ通方の作者にして始めて見得せん。何の故に。仏法に許多の事無し、那裏にか个の情見を得来らんや。它是是れ心機泯絶す。那裏にか許多般の煨糟有らんや。所以に玄沙道く、「直い秋潭の月影、静夜の鐘聲の、扣撃に随いて以て虧くること無く、波瀾に触れて散ぜざるに似たるも、此は猶お是れ生死岸頭の事なり。」這裏

に到りては、亦た得失無く、亦た是非無く、亦た奇特無く、亦た玄妙無し。既に奇特玄妙、得失是非無くんば、作魔生が它的の西より東に過ぎ、東より西に過ぐるを会する。且く道え、意、作魔生。

瀉山老漢も也た管わず。若し是れ瀉山にあらずんば、它に折挫せらるること一上せん。看よ它的の瀉山老作家、只管、坐ながらにして成敗を看る。若し深く来風を辯ぜずんば、争か能く此の如くならん。雪竇、一語を着して云く、「勘破し了れり」と。「一に鉄櫛子の似くに相似たり。衆中、之を着語と謂う。両辺に在りと雖然も、却つて両辺に住せず。作魔生が它的の「勘破し了れり」と道うを会する。什麼処か是れ勘破せし処。且く道え、徳山を勘破せるか、瀉山を勘破せるか。

〔日訳〕

後に瀉山の法会が盛んと聞き、まつしぐらに訪ねていった。瀉山に到着すれば、すぐさま名手同士の対面である。包を解く間もなく、そのまま法堂に上がって、西から東、東から西へと歩き回り、振り返って、「いない、いない」と言うと、出て行ってしまった。さて、気でもふれたか、どうしたか。みなしばしば誤って、これは一時の方便だと言うが、まあ、まとはずれだ。どうだ、彼のやりかたを見てみる。なかなか立派ではないか。だから言うのだ、「傑物でなければ人を驚かすことはできぬ。獅子児でなければ聖人の相手はつとまらぬ」と。ここまできると、道に通じたやり手でなければ分かるまい。なぜか。仏法にはクダクダしい理屈も、妄情をさし挟むスキもない。徳山は心のはたらきを滅却しておるから、あれやこれやの雑念など無いのだ。玄沙はこう言っている、「たとえ、秋の水面に映る月影が、波に触れながら砕けぬように、あるいは夜のしじまに一突きされた鐘の音が、途切れなく響くように、

綿密に心を整えたとしても、それはまだ生死の境界である」と。徳山の境地までいたれば、得失是非といった思いはかりも、奇特玄妙を求める気持ちもない。とすれば、徳山が法堂を歩き回ったことは、どう理解すればよいのか。さあ、彼はいかなるつもりであったのか。

瀉山もまた徳山の相手はしない。もし瀉山でなければ、やり込められていたところだ。しかし、さすがは瀉山、高みの見物を決め込んでおる。相手の内実がよくわかっていなければ、こうはできません。ここで雪竇は一語を着けて言う、「見破ったぞ。」まことに齒の立たぬ一句だ。大衆だいにゅうの中ではこれを著語と言っておる。雪竇の著語は、一見したところ、相対的な意味の次元にありながら、けっしてそこに止まらない。さあ、どこを見破ったというのか。徳山を見破ったのか、それとも瀉山を見破ったのか。

〔注釈〕

○既至瀉山＝「既至」の二字、張本に無し。

○亦不得解包＝張本に「包亦不解」に作る。一夜本では「包を解くこともできず」、張本では「包も解かずに」で、わずかにニュアンスが異なる。

○人多錯會、用作（見）「建」立。且沒交涉＝「見」は張本に「建」に作る。大拙校訂本もこれに従う。一夜本に「見」とするのは音が近いことによる誤り。「徳山の顛狂なふるまいを、仮に設けた方便と見なすことが多いが、的外れだ。」「建立」は方便として仮に教えの門を立てること（小川隆『続・語録のことば―『碧巖録』と宋代の禪』、禪文化研究所、二〇一〇、七一―七二頁参照）。

○所以道：「驚群須是英靈漢，敵聖還它師子兒。」ハ傑出した男でなければ人々を驚かすことは出来ない。獅子児でなければ聖人とわたりあうことはできない。ここでは徳山の手並みを称える。張本に「群を出ずるは須らく是れ英靈の漢なるべし、勝れたるに敵するは他の師子兒に還す。選仏、若し是の如き眼無くんば、飯饒い千載なるとも又た奚をか為ん」とする。張本に見える四句の偈は、圓悟の同門、南堂元静の作で、宋・法心集、元・普会統集『禪宗頌古聯頌通集』卷二二の増収部分（Z一一五・二六九上）、宋・宗永集、元・清茂統集『統集宗門統要』卷五・睦州章の統集部分（柳田・椎名共編『禪学典籍叢刊』第一卷、三七一頁）に録される。ただし、前二句はそれ以前より成句としてよく知られていたようである。『宗門統要集』卷九・雲門章、「大瀉詰云く、『大凡そ草を撥つて風を瞻るは、須らく是れ其の人なるべし。雲門は、青天の霹靂、早地の震雷にして、直に百里の魂慮変懾するを得、と謂うべし。道うを見ずや、群を驚るかすは須らく是れ英靈の漢なるべし、勝れたるに敵するは他の師子兒に還す、と。』」（柳田・椎名共編『禪学典籍叢刊』第一卷、二〇一頁下）。

○仏法無許多事，那裏得个情見来ハ「得个」の二字、張本は「著得」に作る。仏法には細々しい理屈は無く、妄情によつて推し量る余地はない。臨済が大愚のもとで開悟し、「仏法に多子無し」とした因縁を踏まえる。『圓悟語録』卷八、「臨済は黄檗に在りて三度設問し、六十棒を喫らう。大愚の面前に至るに及びて、覺えず道く、『元来、黄檗の仏法に多子無し』と。此の似き得処、豈に群を驚かさざらん。」（T四七・七四九下）。『圓悟語録』卷二二、「仏法、本より許多無し。若し無心・無念・無事・無為・無計校・無分別を以てせば、至竟著衣、至竟喫飯、何ぞ曾て一絲毫を動著せん。便ち能く報化の仏頭を坐断し、一糸毫の仏法の見解を起ささず。」（T四七・七七〇上）。

○它是心機浪絶，那裏有許多般煨糟ハ彼は心の働きを滅している、どこにあれやこれやの雑念が有ろうか。張本は

「是他心機那裏有如許多阿勞」に作る。『圓悟語録』卷一四「示華藏明首座」、「得たる底の人は、心機泯絶し、照用已に忘る。渾て領覽する無く、只守だ閑閑地として、諸天は華を捧ぐるに路無く、魔外は潜かに覷いて見えす。」(丁四七・七七八上)。「燠糟」は「麀糟」とも表記し、不潔なことを。謬見、雑念等を表す。第一則【頌著語】「榻薩呵嘯」の条を参照。姜勇仲「釈・麀糟」(『周口店師範学院字報』第二五卷第一期、二〇〇八)は、ともに「汚、濁」の意を表す二文字よりなる同義複詞の「奥渫」が「燠糟」「麀糟」に転化したとする。

○所以玄沙道：「直似秋潭月影、静夜鐘声、随扣撃以無虧、觸波瀾而不散、此猶是生死岸頭事。」〓秋の深淵に映る月影が、波に触れても散らず、静かな夜に打たれた鐘の音が途切れないように、綿密に心を静めたところで、それはただ作爲的な冥想状態に過ぎない。ここでは、徳山がそのような境地を突き抜けているとする。『玄沙広録』卷中、「夫れ仏の出世するは、元より出入無く、名相にして体無し。道は本より如如、法爾天真にして、修証に同じからず。……箇中に纖毫も道い尽くさざれば、即ち魔王の眷属と爲る。句前句後は是れ学人の難処なり。所以に一句天に当らば、八万の門は永えに生死を絶す。直饒い秋潭の月影、静夜の鍾声の、扣撃に随いて虧くる無く、波瀾に触れて散ぜざるに似るを得るも、猶お是れ生死岸頭の事なり。」(乙二二六・三七九上一下)。この語を含む上堂は、他に『禅林僧宝伝』『正法眼蔵』等にも録され、このうち『禅林僧宝伝』のみ文字の異同が大きい(入矢義高監修、唐代語録研究班編『玄沙広録』中、禅文化研究所、一九八八、一二二—一二三頁参照)。「秋潭の月影」「静夜の鍾声」はともに心のしずまった状態の比喩。『寒山詩』、「吾が心は秋月の、碧潭に清くして皎潔たるに似たり。物の比倫するに堪うる無し、我をして如何にか説かしめん。」(項楚『寒山詩注』、一三七—一四三頁。上掲入矢監修『玄沙広録』卷中参照)。しかし、そのような作爲的な冥想状態は、いまだ至上の境地ではなく、永遠に生死を絶するような一句が言え

なくてはならない。『玄沙広録』ではこの後、次のように言う。「縦い塵境は紛紜として、名相は実ならずと悟るも、便ち心を凝らし念を斂め、事を撰し空に帰らんと擬し、目を閉ざし睛を蔵す。終に念の起こる有らば、旋旋と破除し、細相纒かに生ぜば、即便ち過捺く。此の如き見解は、即ち是れ空亡に落つる底の外道、魂の散ぜざる底の死人なり。」(原文に「縦悟則……」とするが入矢監修『玄沙広録』中、一三三頁に従い「則」を衍字と見なす)。

○到這裏、亦無得失、亦無是非……このような生死を超越した境地に至れば、得失是非、奇特玄妙といった思いはかりは無い。とすれば、徳山が法堂の上を歩き回るといふ顛狂のような真似をしたのは、いったいどういう考えだったのか。説明してみよ。『圓悟語録』卷二二、「這裏に到らば、凡聖の情は尽き、生死の関は透り、得失是非、了然として生ぜず。」(T四七・七六七下)。「一夜碧巖」第一一則・頌評唱、「情を尽くして仏法の道理を捨却し、玄妙奇特を一時に放下せば、却つて些子を較えり。」(大拙校訂本、上五五頁)。

○若不深辯來風、爭能如此||相手の内実をよくわかっているからこそ、このような対応ができる。『一夜碧巖』第二六則・本則評唱、「這の僧の礼拝するは、虎の鬚を捋くが似くに相い似たるも、只だ轉身の処を争う。頼に百丈の頂門に眼を具し、肘下に符有り、四天下を照破し、深く來風を辨ずるに値う。所以に便ち打つ。若し是れ別人ならば、它を奈何ともする無し。」(大拙校訂本、上二二四頁)。

○雪豆着一語云:「勘破了也」,一似鉄橛子相似。衆中謂之着語||張本に「一」無し。「鉄橛子」は鉄のぼうく。どうにも歯が立たないシロモノ。論理的には理解できない一句。同様の形象を表す言葉として「鉄酸餡」がある(小川隆『禪の語録』導説)、筑摩書房、二〇一六、八八―九一頁参照)。「一夜碧巖」第五〇則・頌評唱、「這箇は鉄橛子の如くに相い似たり。撥け去れず、拽き来れず、擧を挿み得ず。」(大拙校訂本、上二二〇頁)。

○雖然在兩辺、却不住兩辺。」「兩辺に在る」とは、差別の世界、相対的な意味の次元に落ちること。雪竇の著語は、「徳山を見破った」、あるいは「瀉山を見破った」、と特定の意義で解しうるが、そのような意味に固定されるものではない。『信心銘』、「動を止めて止に帰すれば、止は更に強いよ動ず。唯だ兩辺に滞らば、寧ぞ一種を知らんや。」（『景德伝灯録』卷三〇、禪文研本、六一六頁上。西谷啓二・柳田聖山編『禪家語録』Ⅱ、世界古典文学全集第三六卷B、筑摩書房、一九七四、一〇六頁参照）。『一夜碧巖』第二三則・本則評唱、「此は之を著語と為し、兩辺に落在す。兩辺に落在すと雖も、而して兩辺に住せず。」（大拙校訂本、上一二頁）。同第三一則・本則評唱、「雪豆道く、『錯』兩辺に落在す。爾、若し兩辺に去きて会せば。雪豆の意を見ず。」（大拙校訂本、上一四一頁）。

【本則評唱三】

至門首、却云：「也不得草草。」再具威儀、上法堂相見。要拔本、也不得草草。要与瀉山掀出心肝五藏、戰一場、具威儀、再入相見。瀉山坐次、徳山提起坐具、云：「和尚。」瀉山擬取扠子、徳山便喝、扠袖而出。奇特。衆中多道：「瀉山怕它。」有什交涉。瀉山不忙。所以古人道：「智過於人獲得人、智（智）過於禽方能獲禽。」參得（者）這個禪、尽大地、草木、叢林、人物、花果、森羅万像、一時作一喝來、它亦不聞。掀倒禪床、喝散大衆、它亦不管。如天之高、似地之厚。瀉山若無坐斷天下人舌頭底脚手時、驗它也大難。若不是一千五百人善知識、到此也分疎不下。瀉山運籌帷握、決勝千里。徳山背却法堂、着草鞋便行。意作广生？你且道徳山是勝是負？瀉山恁广、是勝是負？

雪豆着語云：「勘破了也。」是它下工夫、見透古人譏訛極則處、方能如此。不妨奇特。雪豆着兩個勘破、分作三段、方顯此公案。似傍人斷二人。

〔訓読〕

門首に至りて、却つて「也た草草なるを得ず」と云い、再び威儀を具え、法堂に上りて相見す。抜本せんと要さば、也た草草にするを得ず。瀉山に心肝五藏を掀出して、戦うこと一場せんと要し、威儀を具え、再び入りて相見す。瀉山坐する次で、徳山、坐具を提起して云く、「和尚。」瀉山、払子を取らんと擬するに、徳山便ち喝し、袖を払いて出ず。奇特なり。衆中多く道う、「瀉山は它を怕る」と。什の交渉か有らん。瀉山、忙せず。所以に古人道く、「智、人に過ぎて人を獲得し、智、禽に過ぎて方めて能く禽を獲」と。この禪に參得せば、尽大地、草木、叢林、人物、花果、森羅万像、一時に一喝を作し来るとも、它是亦た聞かず。禪床を掀倒し、大衆を喝散すとも、它是亦た管せず。天の高きが如く、地の厚きに似たり。瀉山、若し天下人の舌頭を坐断する底の脚手無き時には、它是亦たとも也た大いに難し。若し是れ一千五百人の善知識ならざれば、此に到りては也た分疎し下せず。瀉山は籌を帷握に運らし、勝ちを千里に決す。徳山、法堂に背却けて、草鞋を着けて便ち行く。意は作麼生。你、且く道え、徳山は是れ勝つか、是れ負くるか。瀉山の恁麼きは、是れ勝つか、是れ負くるか。

雪竇、着語して云く、「勘破し了れり」と。是れは它、工夫を下し、古人の譏訛極則の処を見透して、方めて能く此の如くなり。不妨だ奇特なり。雪竇、两个の勘破を着け、分ちて三段と作し、方めて此の公案を顕す。傍人の二人を断ずるに似たり。

〔日訳〕

しかし門のあたりまで来ると、「とはいえ、いい加減にするのもよくない」と言い、もう一度身なりを整え、法堂に上がって相い見えた。仕切り直しとはいえ、いい加減にはできぬ。腹の内をさらけ出し、瀧山と一戦交えようと、身なりを整え、もう一度目通りしたのである。瀧山が坐っている、徳山は坐具を持ち上げ、一言、「和尚」。そこで瀧山が扨子を取ろうとすると、徳山はたちまち一喝し、袖を払って出て行ってしまった。すばらしい。大衆の中には「瀧山はおそれをなした」という者も多いが、なんたる見当違いか。瀧山はあわてない。だから古人は言うのだ、「智慧が人に勝れば、人を捕らえることができる。智慧が猛禽に勝れば、猛禽を捕らえることができる」と。この禪を我がものとするれば、世界中の草や木や、人や花や、森羅万象が一斉に喝を下そうとも耳に入らぬ。禅床をひっくり返されようが、一喝して大衆を追い散らされようが、気にもとめぬ。天が高く地が厚いようにどっしりとしている。もし天下の人を圧倒する手並みが瀧山に無ければ、徳山を試すことすら難しかったであろう。ここに至っては、千五百の学僧を領する瀧山の主でなければ対処しきれぬ。まさに、陣幕の内ではかりごとをめぐらせ、千里の外に勝敗を決するといふものだ。いっぽう、徳山は法堂に背を向け、わらじを履いてそのまま立ち去ってしまった。どういふつもりか。さあ、徳山は勝ったのか、負けたのか。瀧山のこのやりかたは、さて勝ったのか、負けたのか。

ここで雪竇は著語して言う、「見破ったぞ。」これこそ、彼が探求を重ね、古人の難解で究極のところを見抜いたからこそ言えた一句である。たいへんにすばらしい。雪竇は二つの「見破ったぞ」で全体を三段に分け、この公案の真意を明らかにした。まるで傍観者が二人に裁きをつけているかのようだ。

〔注釈〕

○至門首、却云：「也不得草草。」再具威儀……〓張本では「徳山遂出。到門首、却要拔本、自云：『也不得草草。』要與瀉山揪出五臟心肝、法戰一場、再具威儀、却回相見」とする。徳山は、このままいい加減にするのも良くないと、すべて包み隠さず一戦交えるため、身なりを整えて再びお目通りした。「拔本」は負けた分を取り返すこと。ここでは、一度目の相見で何も言わずに法堂を出てしまったのを、もう一度やり直そうとしたことを指す。【本則】【著語】

「東辺落節、西辺拔本」の注釈を参照。「揪出心肝五蔵」は自分の考えをすべてさらけ出すこと。『一夜碧巖』第二二則・頌評唱、「雪豆、心肝五蔵を吐き出だし来りて、你ら諸人に似よしおれり。」（大拙校訂本、上五九—六〇頁）。

○衆中多道：「瀉山怕它。」有什交涉〓大衆の中には、瀉山がこれといった反応を示さなかったことを捉えて、「瀉山は徳山に恐れをなしたのだ」という者もいるが、的外れな理解だ。

○所以古人道：「智過於人獲得人、智（智）過於禽方能獲禽。」〓張本では「智過於禽獲得禽、智過於獸獲得獸、智過於人獲得人。」に作る。本文中、二つ目の「智」は衍字。出典は未詳。ここでは瀉山の力量が徳山に勝っていることを言う。

○參得（者） 這個禪、尽大地、草木、叢林……〓瀉山のごとき境界に至れば、たとえ世界中の人や物、はては森羅万象が一度に喝を下しても、あるいは坐っている禪床をひっくり返されたり、大衆を一喝して追い払われたりしても、構うことなどない。天地のように泰然自若としているばかりだ。始めの一句、張本に「參得這般禪」とする。「者」と「這」は互用され、一方が衍字。「掀倒禪床、喝散大衆」は、力量のある学僧が師の見解や權威を否定する行為の典型としてしばしば用いられる。『雲峰悅禪師語録』室中頌古、「拏す。祖師示衆して云く、『吾に一物有り、青黄赤

白男女等の相に非ず。汝等諸人、還た識るや。」師云く、「当時、忽し箇の漢有り、出で来りて衆の為に力を竭くし、身命を惜しまず、便ち与に禪床を掀倒し、大衆を喝散せば、子孫も也た未だ断絶するに到らず。」（『古尊宿語録』卷四一、中華書局、一九九四、七六八頁）。『大慧普覺禪師語録』卷八、「恁麼き説話、太殺だ良を圧えて賤と為し、好悪を識らず。或いは一箇の性命を惜しまざる底の衲僧に、出で来りて禪床を掀倒し、大衆を喝散せらるとも、也た他を怪しみ得ず。」（丁四七・八四四上）。

○瀉山若無坐断天下人舌頭底脚手時、驗它也大難。天下の人に有無を言わせぬほどのすぐれた手並みが無ければ、徳山の力量がいかほどか試験することも難しい。『景德伝灯録』卷二・臨濟章、「黄檗遂て侍者を喚ぶ。『几案と禪板を把将来れ。』師曰く、『侍者よ、火を把将来れ。』黄檗曰く、『然らず。子但だ将ち去け。已後天下人の舌頭を坐断せん。』師即便ち発し去る。」（禪文研本、二〇八頁。入矢監修、景德伝灯録研究会編『景德伝灯録』四、三四四—三四六頁参照）。張本『碧巖録』第二〇則・本則評唱、「大凡そ要妙を激揚し、宗乘を提唱するは、第一機下に向いて明得せば、以て天下人の舌頭を坐断すべし。儻或し躊躇せば、第二に落在せん。」（丁四八・一六〇中）。「時」はこれまで一般に下の句に付け、副詞として理解されているが、本稿では上の句に続けて、仮定を表す用法ととる。「若く時」で「もしくならば」。張本『碧巖録』第二八則・本則評唱、「百丈云く、『我、太殺だ爾が為に説き了れり。』且く道え、什麼処か是れ説く処。若し是れ泥団を弄する漢なる時は、両箇ともに漏漏漚漚ならん。若し是れ二り俱に作家なる時は、明鏡の台に当たるが如し。」（丁四八・一六八下。一夜本には二つ目の「時」無し）。『一夜碧巖』第四二則・頌評唱、「雪豆の意に道く、『当時、若し雪団を握りて打つ時は、居士縦い如何なる機鋒有りと、亦た過ぎ得難し』と。」（大拙校訂本、上一八三頁）。「驗」は相手の力量をテストする意。『一夜碧巖』第一〇則・本則評唱、「這の

老漢も也た忙あわてず、緩ゆる緩ゆる地かに它かれに向かいて道みちく、『老僧、汝なに一喝あつかせらる。』恰あも它かれの話を領うするが似にく相似にて、又た它かれを驗たすが似にく相似にたり。身みを斜ななめにして它かれ如何いかなるかを看みるに、這この僧そう又た喝あつかす。』(大拙校訂本、上四九—五〇頁)。

○若不是一千五百人善知識、到此也分疎不下二千五百人の学僧を聚める瀉山の主にふさわしいとされた瀉山靈祐の力量でなければ、このような場面であまく受け答こたへすることはできない。「一千五百人の善知識」は、以下の故事にもとづき瀉山を指す。『景德伝灯録』卷九・瀉山章、「時に司馬頭陀、湖南より来る。百丈、之に謂いいて曰く、『老僧、瀉山に往かんと欲す、可なりや。』對こたえて云く、『瀉山は奇絶にして、千五百衆を聚あむべし。然るに和尚の住する所に非ず。……百丈云く、『吾が衆中に人有りて住み得る莫しや。』對こたえて云く『之を歴觀りせんと待ます。』……又た典坐を喚よび来らしむ(即ち祐師なり)。頭陀云く、『此は正に是れ瀉山の主なり。』(禪文研本、一三三頁上)。「分疎」は分析すること、整理して説明すること。『一夜碧巖』第一一則・本則評唱、「這この老漢、果然はして分疎わせ下おせず、便たち漏はして云く、『禪無しとは道みちわず、只是ただだ師無し。』(大拙校訂本、上五五頁)。張本『碧巖録』第五一則・本則評唱、「此の僧、雪峰に參するや、見解、只ただだ恁かんん處こに到るのみ。巖頭に見まゆるに及びては、亦た曾て一事を成し得ず、虚むなしく他の二老宿の二問一答、一擒一縱するを煩わわし、直に如今に至るまで、天下の人、節角論訛せまと成して、分疎わせ下おせず。」(T四八・一八六上)。「朱子語類」卷一〇一、「五峰の『疑孟』を辨わざるの説は、周遮しうしく分曉わせず。若是も恁かんん地こく『孟子』を分疎わせば、剗か地えつて沈淪しんし、出世するを得る能よわず。」(中華書局、一九九四、二五九四頁)。

○瀉山運籌帷握、決勝千里二「握」は「幄」に通ず。「運籌……」の成句は『史記』高祖本紀に出る。瀉山が扠子を取ろうとしたことを指し、これは瀉山の深謀遠慮より出たもので、これによって空無に徹する徳山を試したと捉えて

いる。(張本の本則では、「瀉山擬取扠子」の下に「運籌帷幄之中」の著語をつける。【本則】【著語】参照)。張本『碧巖録』第七九則・本則評唱、「投子は朴実頭にして、逸群の辯を得たり。凡そ問を致すもの有らば、口を開くや便ち胆見え、餘力を費やさずして、便ち他の舌頭を坐斷す。籌を帷幄の中に運らし、勝ちを千里の外に決すと謂うべし。」(T四八・二〇五下)。

○是它下工夫、見透古人譏訛極則処、方能如此。不妨奇特。『譏訛』、張本は「警訛」につくる。いづれも入り組んでわかりづらいこと。『祖庭事苑』卷二・雪竇頌古・「譏訛」条、「譏は当に諍に作るべし。譏、音は鏡。譏は志呼なり。義に非ず。」(Z一一三・五四下)。「諍」は『集韻』爻韻に「言、恭謹ならず」とする。「訛」にはいつわり、いつわりの言葉等の義があり、『祖庭事苑』の説に従えば、「諍訛」は並列式複合詞と理解される。張本『碧巖録』第七則・頌評唱、「雪竇は是れ作家。古人の咬み難く嚼み難く、透り難く見難き節角諍訛の処に於いて、頌出して人を見て見しむるは、不妨だ奇特なり。」(T四八・一四七下)。いっぽう、『不二鈔』『諸録俗語解』などでは「節角警訛」と「佶屈警牙」の類似が指摘される。韓愈「進学解」、『周誥』『殷盤』は佶屈警牙なり。『韓愈全集校注』、四川大学出版社、一九九六、一九一〇頁)。ここから考えれば、晦洪難解の意を表す連綿詞「警牙」が転訛して「警訛」となり、これがさらに「諍訛」に、「諍訛」が「譏訛」に転訛したとも理解される。待考。

○雪豆着两个勘破、分作三段、方顯此公案。似傍人断二人。雪竇は「勘破了也」の著語を二つ着け、公案全体を三段に分けたことよって、その意味を明らかにした。これは傍観者が瀉山と徳山の二人を冷静に判定しているかのようだ。

【本則評唱四】

後來這老漢、緩緩地至晚方問首座云：「適來新到，在什廣處？」首座云：「當時背却法堂，着草鞋出去也。」瀉山云：「此子已後向孤峰頂上盤結草庵，呵仏罵祖去在。」你且道它意作廣生？瀉山老漢不是好心。德山後來雖呵仏罵祖，打風打雨，依旧不出它窠窟，被這老漢見透它平生伎倆。到這（到）裏，喚作瀉山為它授記得廣？喚作沢広藏山，理能伏豹得廣？且喜勿交涉。雪豆知此公案落處，敢与它斷，便道：「雪上加霜」，重拈起交人看。若見得去，許你与瀉山、德山、雪豆同參；若也不見，切莫要強生情解。

【訓読】

後のち來に這この老漢、緩おも緩むろ地に晚ゆふに至いたりて方はめて首座しゆざに問とうて云いく、「適さ來きたの新到しんたう、什い麼ず處こにか在ある。」首座しゆざ云いく、「當時たうじ、法堂はうたうに背せ却をけて、草鞋そうげを着きて出でて去いれり。」瀉山しやくざん云いく、「此この子こ、已お後のち、孤峰頂上こふくていじやうに向むかひて草庵そうあんを盤結ばんけつし、仏ぶつを呵あし祖そを罵ののし去いらん在ある。」你なんぢ、且なく道みちえ、它かれの意いは作い麼かん生せい。瀉山老漢しやくざんらうまんは是これ好よ心こころにあらず。德山とくざん、後のち來きたに仏ぶつを呵あし祖そを罵ののり、風かぜを打うたかせ雨あめを打うたらずと雖なも、旧ふるに依よりて它かれの窠窟そくを出いでず、這この老漢らうまんに它かれの平生へいぜいの伎倆ぎりやうを見透みかさる。這こ裏こゝに到いたりては、喚こゝろびて瀉山しやくざん、它かれの為ために授記じゆきすと作なすが得えきか、喚こゝろびて沢広しやくひろくして山やまを藏かくし、理能よく豹ひょうを伏みすと作なすが得えきか。且な喜よろこすらくは勿な交涉しやくせつ。雪竇しやくざうは此この公案こうあんの落處らくこを知しり、敢あえて它かれの与よに斷たじ、便たち「雪上しやくじやうに霜しもを加くう」と道みちい、重おもねて拈起ねんじして人ひとをして看みしむ。若もし見得みし去いらば、你なんぢを瀉山しやくざん、德山とくざん、雪竇しやくざうと同參どうさんと許ゆるめん。若も也もし見みざれば、切せつに強たいて情解じやうげを生なずること莫な要なかれ。

〔日訳〕

このオヤジそのあとのんびりとして、晩になってようやく首座に尋ねた。「先ほどの新入りはどこか。」首座いわく、「あのまま法堂に背を向け、わらじを履いて出て行つてしまいました。」瀉山いわく、「こやつ、こののち、何者も寄せつけぬ山頂に草庵を構え、仏祖を罵ることだろうよ。」さて、いかなる意か。瀉山は好意で言っているのではない。徳山は後に仏を罵り祖を罵り、容赦なくはげしい接化をふるつたが、相変わらずひとつの型から抜け出せなかつた。瀉山はそのお決まりのやり口を見抜いていたのだ。こここのところ、瀉山が徳山の成道を予言したと言うべきか、それとも瀉山のほうが一枚上手だつたと言うべきか。いやいやどちらも的外れ。雪竇はいえば、この公案の勘所を知つておればこそ、きつぱりと裁定を下し、「余計なうわのせ」と言つた。こうして公案をもう一度取り上げ、みなに見せてやつたのだ。ここが分かれば、瀉山・徳山・雪竇と同じ境地と認めてやろう。もし分からなければ、無理に理屈をこねまわしてはならんぞ。

〔注釈〕

○後來這老漢、緩緩地至晚方問首座云。「緩緩地」はゆくつりと、悠揚せまらぬ態で。瀉山は徳山と問答した後もあわてることなく、晩になっておもむろに首座に尋ねた。前掲『一夜碧巖』第一〇則・本則評唱、「這の老漢も也た忙あわてず、緩緩おもむろ地に它かれに向かいて道いく、『老僧、汝に一喝せらる。』」(大拙校訂本、上四九—五〇頁)。

○瀉山老漢不是好心こ 瀉山が「此の子こ、已後このち、孤峰頂上こに向いて……」と言つたのは、けつして好意から徳山をほめたわけではない。『擊節録』第四〇則・評唱、「雪竇の笑えるは是れ好心にあらず、笑いの中に刀有り。」(Z一一七・

四七九下)。

○徳山後來雖呵仏罵祖，打風打雨，依旧不出它窠窟，被這老漢見透它平生伎倆。雖、張本に無し。のちに徳山は、仏祖の權威にとらわれず、妥協のないはげしい接化を振るつたが、結局はお決まりのパターンを抜け出すことができなかつた。瀉山にはそのいつもの手口を見抜かれていたのである。「打風打雨」は接化の厳格ではげしいさまを喻える。圓悟はしばしばこの語を使つて徳山の禪風を表す。「圓悟心要」卷下「示琛上人」、「見ずや、徳山、龍潭に在りて紙燭を吹き、豁然と警地して、便ち道く、『今日より去、天下の老和尚の舌頭を疑わず』と。後來に住山しては、風を打かせ雨を打らせ、不妨だ性燥たり。」(Z二二〇・七五九上)。「擊節録」第一則・評唱、「後に徳山に住しては、三日に一回、堂を捜し、凡そ文字を見ば、即時に焼却す。十二時中、風を打かせ雨を打らせ、後來に巖頭・雪峰を出だして、龍の如く虎の似くに相似たり。他の葛藤を打す時に到りては、自ら奇特の処有り。」(Z一一七・四五一下)。以下の例での二老漢は、翠微無学と臨濟義玄を指す。『一夜碧巖』第二〇則・本則評唱、「這の二老漢、風を打かせ雨を打らせ、天を驚かし地を動かすと雖然も、要且つ曾て今の明眼の漢を打著せず。」(大拙校訂本、上九五頁)。「窠窟」は既成觀念、ドグマ。「一夜碧巖」第二則訳注【示衆】の注釈を参照。

○到這(到)裏、喚作瀉山為它授記得广?喚作沢広蔵山、理能伏豹得广。二つ目の「到」は衍字。瀉山は「此の子、已後、孤峰頂上に向いて……」と言つたが、これは徳山の成道を予言したものか、それとも瀉山が徳山より器が大きかつたということか?「沢広蔵山、理能伏豹」は成句としてしばしば使われる。「沢広蔵山」は『莊子』大宗師篇、「夫れ舟を壑に蔵し、山を沢に蔵すは、之を固しと謂う」(中華書局、二〇〇四第二版、二四三頁)による。「理能伏豹」は、『祖庭事苑』卷二「理能伏豹」条、「伏豹は当に伏巖に作るべし。於教の切。很戻(ひねくれるさま)な

り。」(Z一三・三七下)。四卷本『大慧普說』卷四「正禪人請普說」、「所謂いわゆるる「理あれば能く豹を伏す」なり。纔かに道理上に到らば、自然に你なんじをして礼拜せしめん。」(柳田・椎名共編『禪学典籍叢刊』第四卷、三〇九—三一〇頁)『豹』は『豹』に同じ。日本校訂藏經本では『豹』を『鱣』に作る)。これらによれば、「道理があればひねくれ者(あるいは豹)をも服従させることができる」と理解できる。いっぽう道忠『五家正宗贊助桀』風穴沼禪師章では「沢広」乃至『伏豹』は、反して、沢広からざれば、山を藏すことを得ず、狸に非ざるの獸は、豹を伏すること能わずと謂う」という(禪文化研究所、一九九一、二六五頁下)。これによれば「理」は「狸」のあやまりで、「狐狸のよくなずるがしこい動物でなければ、豹を従わせることはできない」の意。本稿では前者の解をとる。いずれにしても、「沢」「理」は瀉山を、「山」「豹」は徳山を指し、瀉山が徳山よりも優れていることを言う。

○且喜勿交渉張本は「若怱麼、且喜没交渉」とする。「瀉山が徳山に授記した」、あるいは「瀉山のほうが一枚上手だった」という見方でこの公案を理解してはいけない。

○雪豆知此公案落処、敢与它断、便道：「雪上加霜。」重拈起交人看張本で「便」を「更」に作り、また「重拈」の上に「又」有り。雪竇はこの公案の勘所を知っていたので、「余計なうわのせ」と裁定を下すことで、公案の内容をもう一度なぞって、人々に見せたのである。第一則【頌評唱三】「重拈一遍」の注釈を参照。

【頌】

一勘破、二勘破、〔好。／過。／言由在耳。／両重公案。〕

雪上加霜曾險墮。〔三段不同。／在什广処。〕

飛騎將軍入虜庭、〔嶮。／（敗）〕〔敗〕軍之將不勞更斬。／喪身失命。〕

再得完全能幾箇。〔死中得活。〕

急走過、不放過、〔傍若無人。／尽你神力堪作何用？／三十六路。／理能伏豹。／穿却鼻孔。〕

孤峰頂上草裏坐。〔果然。／為什广却在草裏坐。〕

咄！〔会广？／兩刃相傷。／兩兩三三旧路行。／唱拍相隨。便打。〕

〔訓読〕

一たび勘破し、二たび勘破し、〔好し。／過ぎたり。／言由お耳に在り。／兩重の公案。〕

雪上に霜を加え、曾て險うく墮せんとす。〔三段同じからず。／什广処にか在る。〕

飛騎將軍、虜庭に入る、〔嶮うし。／敗軍の將は更に斬るを勞せず。／喪身失命す。〕

再び完全を得るもの能く幾個ぞ。〔死中に活を得。〕

急に走過するも、放過せず、〔傍若無人。／你的神力を尽すも、何の用を作すにか堪えん。／三十六路。／理能く豹を伏す。／鼻孔を穿却す。〕

孤峰頂上、草裏に坐す。〔果然して。／什广の為にか却つて草裏に在りて坐す。〕

咄。〔会すや。／兩刃相傷つく。／兩兩三三旧路を行く。／唱拍相隨う。便ち打つ。〕

〔日訳〕

一つめ見破り、二つめ見破り、「よし。／手遅れ。／聞き覚えのある言葉。／二度目の過ち。」

余計なうわのせして、あわやしつぽを出すところ。「三つの著語、同じではない。／どこがその過ちか。」

飛騎將軍の李広は、匈奴の地深く入ったが、「危うし。／敗軍の將は斬るに及ばず。／命を落とすぞ。」

もう一度、身を全うして帰れるものは、そうそうおらぬ。「九死に一生。」

いそぎ走り去ろうとも、見逃しはせぬ。「傍若無人。／どんなに頑張っても無駄なこと。／逃げるが勝ち。／一枚上手。／鼻に輪をつけて引きまわす。」

こやつめ、孤高の山の頂で、胡坐をかいてふんぞり返るぞ。「やはり。／「孤高」だのに「胡坐をかく」とは、これいかに。」

こら。「分かるか。／共倒れ。／三人そろっていつもの馴れあい。／びたりと合った歌と合いの手。／ここで一打ち。」

【注釈】【頌】

○雪上加霜曾險墮 〓 「險」は、「あやうくくするところであった」の意。「曾て險あやうく墮せんとす」とは、瀉山との問答において、徳山の立場がもうすこしで破綻するところだったことを言う。【頌評唱一】によれば、「墮」は「話墮」の「墮」で、論理が破綻すること。

○飛騎將軍入虜庭 〓 「虜庭」は匈奴の領域。「飛騎將軍」は漢の武將李広を指し、瀉山の法会に飛び込んだ徳山を喩える。【頌評唱二】を参照。

○再得完全能幾箇 〓 漢の李広のように、徳山は瀉山の法会をなんとか切り抜けたが、もう一度同じことをやって無傷

で帰れる者などほとんどいない。「再」、張本も同じ。『雪竇頌古』に「載」に作る。

○急走過、不放過〓徳山は瀉山に反応するすきを与えず、さっさとその場から立ち去ったが、瀉山は決して見逃していないぞ。

○孤峰頂上草裏坐〓「本来性」という立場に固執し安住する。【本則】の注釈を参照。「孤峰頂上」は絶対的な本来性の境地、「草裏坐」とは第二義に墮ち、そこで安住することを言い、両者は本来、対立する概念である。張本『碧巖録』第一五則・頌評唱、「高き者は之を抑え、下ひくき者は之を挙げ、足らざる者は之に与え、孤峰に在る者は、救いて荒草に入らしめ、荒草に落つる者は、救いて孤峰に処おらしむ。」(T四八・一五六上)。『撃節録』第一〇則・評唱、「古人は太はな煞だ慈悲にして、有る時は孤峰頂上に手を垂れ、有る時は荒草裏に身を横たう。」(Z一一七・四五九上―下)。第三則【頌】【著語】【注釈】「自是你落草」の条も参照。

【注釈】【著語】

○好。／過〓張本は「過」のみで「好」の字無く、下の「言猶在耳」とともに「勘破」の著語とする。大拙校訂本は「好過」で一つの著語と取るが、理解しづらい。本稿では「好」と「過」を二つの著語と取る。「好」はあるいは衍字か。「好」は「よし」。「過」は「過ぎ去ってしまった」、雪竇が「勘破したぞ」と言葉にした時点で立場が固定され、勘所を外している。【本則評唱二】参照。

○言由在耳〓この言葉はまだ耳に残っている。雪竇が本則の言葉を再び使うことに注意を向けさせる。

○両重公案〓二重の罪過。一つ目の「勘破」ですら問題であるのに、二度も「勘破」するとは。

- 三段不同＝二つの「勘破了也」と三つ目の「雪上加霜」の三つの著語はそれぞれ異なった意味を持つ。
- 在什广処＝徳山が破綻しようとしたのは、いったいどこか。
- 嶮＝あぶない。李広が匈奴の領域に入ったことと、徳山が瀉山の法会に出向いたことをかけて言う。
- (販)「敗」軍之将不劳更斬＝「販」、張本で「敗」に作り、大拙校訂本もこれに従う。戦に負けた將軍は、このうへ首をはねるにも及ばない。瀉山に挑んだ徳山は、すでに負けているので相手にする必要もない。
- 喪身失命＝そのような危ないところに入っていけば、命を失うことになる。【本則】【著語】を参照。
- 死中得活＝九死に一生を得た。徳山は首の皮一枚で瀉山の法会から逃れた。
- 傍若無人＝張本では、頌「急走過」の下に「傍若無人。／三十六策。／尽你神通堪作何用。」の三つの著語をつける。今、張本にしたがって、この三つの著語を「急走過」に対するものと解釈する。「傍若無人」は、他人を眼中に置かず傲慢なさま。瀉山を気にもとめず、そのまま法堂を立ち去った徳山を評する。
- 尽你神力堪作何用＝たとえ神通力まで使ってみせたとして何の役にも立たぬ。徳山はさっさと立ち去ったつもりでも、まだ瀉山の手の内から逃れられてはいない。
- 三十六路＝張本に「三十六策」とする。「三十六策、走ぐるを上策と為す」の下の句を省略した形。「三十六路」とするのはまれ。やはり徳山を揶揄して、「逃げるにしかず」とする。
- 理能伏豹＝瀉山のほうが一枚上手だ。【本則評唱四】の注釈を参照。
- 穿却鼻孔＝鼻の穴に引き綱をつけて相手をコントロールすること。瀉山は徳山をしっかりつかまえているぞ。第一
- 則【頌】【著語】の注釈を参照。

○果然〓やはりこのような評価を与えられることになった。「本来性の上に胡坐をかく」と徳山が言われるのは当然の結果だ。

○為什〓却在草裏坐〓「孤峰頂上」とは超脱した本来性の謂いであるのに、それに矛盾するような「草裏に坐す」という言い方をされるのはどうしてか。聴衆に対する問題提起。

○会〓この「咄」の意味が分かるか。聴衆の注意を喚起する。

○両刃相傷〓孤峰頂上に胡坐をかく徳山はもちろん問題だが、それをしかりつけた雪竇も無傷ではいられない。雪竇は「咄」の一語で否定の立場を固定し、かえって第二義に落ちてしまった。

○両三三旧路行〓二人三人と連れ立っていつもながらの道を行く。雪竇の「咄」の一語は、徳山瀉山との馴れあいだ。語は『雪竇頌古』第七四則に出る。

○唱拍相隨。便打〓歌と合いの手がよく合っている。徳山が立ち去り、瀉山が批判し、雪竇がかさねて叱責する。よく息の合ったやり取りだ。「便ち打つ」は圓悟の動作。『宗門統要集』卷八・乾峰和尚章、「大瀉益云く、『乾峰、善く唱し、雲門、善く拍す。唱拍相隨い、風清にして古格なり。……』」（『禪学典籍叢刊』第一卷、一七五頁上）。『圓悟語録』卷三、「乾峰既に鉄樹に華を生ぜば、雲門も亦た紅爐に浪を鼓し、拳踢相応じ、唱拍相隨う。所謂る恁麼き事を明さんと要つさば、須らく是れ恁麼き人なるべし。若し是れ恁麼き人ならば、須らく恁麼き事を解くすべし。」（T四七・七二六中）。

【頌評唱一】

雪豆頌百則公案、一則則拈香拈來、方可頌。它更會文章。透得公案、盤泊得熟、方可下筆。何故如此？龍蛇易辯、衲子難瞞。雪豆參透這因緣、於節角處着三句語、撮來頌出。

雪上加霜、幾乎嶮墮了也。雪豆第二句、通一線道、略露鋒鏑、早是落草。又到第四句、直是落草。你若向句上生句、言上生言、意上生意、作解會、不唯帶累老僧、亦乃辜負雪豆。古人句雖如此、意不如此、終不作會解。

引西天論義。仏問外道：「汝已何為宗？」外道云：「我以一切不受為宗。」仏云：「是見受否？」外道便去。至中路却迴、謂世尊曰：「我義已墮。」仏乃徵其墮處、道云：「是見若受、負門處麤；是見不受、負門處細。」於是告大衆：「中小二乘、天人魔梵所不能知、唯果位大菩薩方證明此事。」

〔訓読〕

雪竇の百則公案を頌するは、一則則に香を拈じて拈し來り、方めて頌すべし。它是更に文章を會す。公案を透得し、盤泊して熟するを得て、方めて筆を下すべし。何の故にか此の如き。龍蛇は辯じ易きも、衲子は瞞り難し。雪竇、這の因縁を參透し、節角の処に於いて三句語を着け、撮り來りて頌出す。

雪上に霜を加え、幾乎と嶮く墮し了らんとす。雪竇の第二句、一線道を通し、略鋒鏑を露すは、早是くも落草す。又た第四句に到りては、直に是れ落草なり。你、若し句上に向いて句を生じ、言上に言を生じ、意上に意を生じ、解會を作さば、唯に老僧を帶累するのみならず、亦た乃ち雪竇に辜負す。古人、句は此の如しと雖も、意は此の如くならず、終に會解を作さず。

西天の論義を引く。仏、外道に問う、「汝は何を已てか宗と為す。」外道云く、「我、一切不受を以て宗と為す。」仏

云く、「是の見は受くや。」外道、便ち去る。中路に至りて却廻し、世尊に謂いて曰く、「我が義、已に墮せり。」仏、乃ち其の墮する処を徴むるに、道云く、「是の見若し受くれば、負門処は麤なり。是の見受けざれば、負門処は細なり。」是に於いて大衆に告ぐ、「中小の二乗、天人魔梵の知る能わざる所にして、唯だ果位の大菩薩にして方めて此の事を証明す。」

〔日訳〕

雪竇は百則の公案を頌するのに、一則ごとに香を焚き、恭しく取り上げてから頌を付けた。そのうえ文章も巧みだった。公案を完璧に見抜き、自由自在に扱えるようになってから、やっと筆を執るのだ。なぜ、そこまでするのか。龍蛇を見分けるなどまだまだやすいくらいで、禪僧をだますのは実に難しい。雪竇は、この徳山挾復の因縁をわがものとし、込み入ったところに三つの著語を着け、要点を取りだして頌を作ったのである。

余計なうわのせして、あやうくボロをだすところであった。雪竇の第二句は、方便の道をひとすじ開き、わずかに切っ先をのぞかせたが、とうに第二義に落ちてゐる。第四句に至っては、まったくもつての第二義だ。しかし、もしお前たちがこの言葉の上にさらに言葉をつけ、意味の上にさらに意味をつくりだし、頭でつかちの理解をしたなら、ワシに累を及ぼすばかりか、雪竇の意も無にすることになる。古人は、言葉でこうと言つていても、真意は別のところにある。けつして理屈をつけることなどないのだ。

(インドの論議の引用) 仏が外道に問うた。「お前は何を宗旨とするのか。」外道いわく、「わたしは一切不受を宗旨とする。」仏いわく、「ではその『一切不受』は受けるのか。」外道はすぐさま立ち去った。しかし途中まで来ると引

き返し、世尊に言った、「私の論旨は、すでに破綻した。」仏がその破綻したところを問いたですと、外道はこう言った。「もし『一切不受』を受けると言えば、粗い矛盾、もし受けないと言えば、微細な矛盾だ。」ここで仏は大衆に告げた。「これは声聞・縁覚や、天・人・魔王・梵天には知りえないこと、修行の完成した大菩薩にして、はじめて悟ることのできる道理だ。」

〔注釈〕

○一則則拈香拏来，方可頌。張本では「一則則焚香拈出，所以大行於世」に作る。雪竇は公案の一則一則を、香を焚いて恭しく取り上げては、頌を付けた。

○它更会文章，透得公案，盤泊得熟，方可下筆。雪竇は文章をすることに巧みで、そのうえ公案の意味を完全に理解し、自由自在に扱えるようになってから、やっと頌を作りはじめる。「泊」、張本では「礮」につくる。「泊」と「礮」は同音。「盤礮」は連綿字で、「自由自在に使う」の意。第一則「頌評唱一」を参照。張本『碧巖録』第一九則・頌評唱、「雪竇は四六の文章を会よくし、七通八達。凡およそ詭訛奇特の公案は、偏ひとへに去きて頌するを愛す。」(丁四八・一五九下)。

○龍蛇易辯，衲子難瞞。道忠『虚堂録犁耕』卷二四、「言うは、龍蛇は本と辨まじ難し、然れども此れ猶なお辨じ易し、衲子に到りては実に欺瞞し難き者なり。」(禪文化研究所、一九九〇、九六一頁)。いまこの説に従う。龍と蛇は本来見分けづらものであるが、しかし、比較の上ではそれすらなお簡単で、禪僧を騙すことはそれ以上に難しい。いい加減な頌を作れば、禪僧にはすぐ見破られる。以下は、龍蛇を別つことは難しいとする例。張本『碧巖録』第六一

則・垂示、「法幢を建て宗旨を立つるは、他の本分の宗師に還す。龍蛇を定め縑素を別つは、須臾すくからく作家の知識なるべし。」(T四八・一九三上―下)。

○雪豆参透這因縁、於節角処着三句語、撮来頌出。『節角』、張本は「節角警訛」につくる。雪竇はこの公案の本質をつかみ、もつとも込み入って複雑なところに三つの著語をつけ、本則の要点をつまみだして、頌を作った。「節角」は難解なこと。しばしば「節角警訛」の形で用いられる。【本則評唱三】の注釈を参照。「撮」はつまみ取ること。

○雪上加霜、幾乎險墮了也。……。「了也」以下【頌評唱一】の最後まで、張本に無し。

○雪豆第二句、通一線道、略露鋒鋦。早是落草、又到第四句、真是落草。……。雪竇の頌は、第二句の「雪上加霜會險墮」で方便として理解可能な筋道をわずかに示し、少しだけその鋭いはたらきを見せているが、これはとうに第二義に落ちている。第四句の「再得完全能幾箇」にいたっては、さらにわかりやすく、ほんとうに第二義というものだ。しかしお前たちがこれらのわかりやすいことばに飛びつき、理屈の上にさらに理屈をつけて理解するのであれば、私に累を及ぼすだけでなく、雪竇の意を無にすることにもなる。古人はことばではこうと言っていたとしても、真意はその通りではない。けっして理知的な理解をすることなどないのだ。この「雪豆第二句」から「終不作会解」まで、張本に無く、また第五則にはほぼ同様の文が見られる。あるいは第五則の文が混入したか。「通一線道」はひとすじの細い道を空ける。方便として理解可能な筋道を示す。『一夜碧巖』第二三則・本則評唱、「這裏こゝに到りて、教中、大いに老婆相なま為にする処有り。所以ゆえに一線道を放ち、第二法門に於いて賓を立て主を立て、機を立て境を立て、問を立て答を立つ。」(大拙校訂本、上二―三頁)。「略露鋒鋦」は鋭い氣勢をわずかに見せること。「鋒鋦」は事物の

尖端、刃物の切つ先。これもしばしば理解のきつかけとなる作為をわずかに示すことを言う。第一則【頌評唱一】を参照。『圓悟語録』卷二二、「所以に石室和尚、纒かに人の来るを見るや、拄杖を举起して云く、『過去諸仏も也た恁麼し、見在諸仏も也た恁麼し、未來諸仏も也た恁麼し』と。只だ爾が与に略此子の鋒鋦を露す。若し是れ箇の人ならば、纒かに恁麼く道うを見るや、撩起して便ち行きて、猶お此子に較れり。」(T四七・七七〇上)。『一夜碧巖』第五則・頌評唱、「雪豆は慈悲にして、当頭に一槌もて撃碎し、一句もて截断するは、只だ是れ不妨だ孤峻なり。擊石火の如く閃電光に似て、鋒鋦を露さず、你的栖泊する処無し。且く道え、意根下に向いて莫索り得るか。」(大拙校訂本、上二六頁)。「落草」は言語の次元に落ちること、第二義に落ちること。第三則【頌著語】を参照。

○引西天論義Ⅱこの物語は、頌の第二句の「墮」を説明するために引かれる。「一切を受けず」を宗旨とする外道に對し、世尊は「その『一切を受けず』という観点そのものは受けるのか」と問い返す。もし「受ける」と答えれば、「一切を受けない」という宗旨に背くことになる。その矛盾は粗く(負門処麤)、わかりやすい。「受けない」といえば、「一切を受けない」という宗旨自体を主張できず、議論が成り立たない。この矛盾は微細で(負門処細)、わかりづらい。いずれにせよ外道の論旨は自家撞着に陥る。「中乘」は縁覚乘の別名。物語の原型は『別記雜阿含經』卷一や『大智度論』卷一等に見られ、禪籍では『宗門統要集』卷一、『正法眼蔵』卷二等に見られる。以下に『宗門統要集』から全体を引用する。『宗門統要集』卷一・大覺世尊釈迦文仏章、「世尊、因みに長爪梵志、論議することを索め、預め約して云く、『我が義、若し墮せば、我、自ら首を斬らん。』世尊曰く、『汝の義は何を以て宗と為す。』志曰く、『我は一切不受を以て宗と為す。』世尊曰く、『是の見は受くや。』志、袖を払いて去る。行きて中路に至り、乃ち省し、弟子に謂いて曰く、『我、当に回りに去き、首を斬りて世尊に謝すべし。』弟子曰く、『人天衆前、幸當に勝つこ

とを得、何を以てか首を斬る。」志曰く、「我、寧ろ有智の人の前に於いて首を斬るとも、無智の人の前に於いて勝つことを得ず。」乃ち歎じて曰く、「仏は我を兩処の負門に置く。若し我、「是の見、我受く」と説かば、是の負門処は麤なりて、故に衆人の共に知る所なり。第二の負門処は細なり。我れ受けざらんと欲す。人の知る少なるを以てなり。」是の念を作し已わりて、而して仏に白して言く、「世尊、一切不受、是の見も亦た受けず。」仏、梵志に語る、「汝は一切法を受けず、是の見も亦た受けざれば、則ち破る所無くして、衆人と異なる無し。何ぞ貢高にして僣慢を生ずるを用いんや。」梵志、答を致す能わず、黙して自ら念じて言く、「我、負処に墮するに、世尊は我が負を彰さず、是非を言わず、大甚深法を得たり。是れ最も恭敬すべし。」即ち坐処に於いて法眼淨を得たり。」(柳田・椎名共編『禪学典籍叢刊』第一卷、一〇頁上)。

【頌評唱二】

只如德山似什广？似飛騎將軍入虜庭。引李広將軍善射，聖封為日飛騎將軍。後去攻虜，被番人捉去，以馬馱之，広詐作死。行至半路，広密開眼，乃見監者手中有弓矢，遂縱身奪監者弓矢，(筭)「弄」殺監者，得馬而走。後有相逐広者，被広一箭一个，賊畏而退。者漢有這般手脚，死中得活。此一説恐謬。後於藍田射虎云云。雪豆引在頌中，用比德山再入相見，一似李広再得歸漢，依旧被它跳得出。

看它古人見到説到，行到用到，不妨英靈。有殺人不眨眼底手脚，方可立地成仏，自由自在。如今人有底問着，頭辺一似有衲僧氣概，一撈兩撈，腰做段，胯做段，七支八離，渾無些子相統処。所以古人道，相統也大難。看它德山、滂山如此。豈是滅裂見解？再得完全能幾個？

〔訓読〕

只だ徳山の如きは什麼にか似る。飛騎將軍の虜庭に入るに似たり。引く、李広將軍は射を善くし、聖封じて為して飛騎將軍と曰う。後に去きて虜を攻め、番人に捉え去らる。馬を以て之を馱するに、広は詐りて死せりと作す。行きて半路に至り、広密かに眼を開くるに、乃ち監者の手中に弓矢有るを見る。遂に身を縦ちて監者の弓矢を奪い、監者を弄殺し、馬を得て走く。後に広を相逐う者有るも、広に一箭に一個せられ、賊畏れて退く。者の漢、這般き手脚有りて、死中に活を得。此の一説恐らくは謬れり。後に藍田に於いて虎を射、云云。雪竇は頌中に引在き、用て徳山の再び入りて相見するに比ぶ。一に李広の再び漢に帰るを得るに似て、依旧ず它に跳び得出でらる。

看よ、它の古人の見到り説き到り、行い到り用い到るは、不妨だ英靈たり。人を殺すに眼を眨かせざる底の手脚有りて、方めて立地に成仏し、自由自在なるべし。如今の人の有る底は、問着せば、頭辺は一に衲僧の氣概有るに似たるも、一撈両撈せば、腰は段と做り、胯は段と做り、七支八離、渾く些子の相統する処無し。所以に古人道く、「相統するは也た大いに難し」と。看よ它の徳山、瀉山の此の如きを。豈に是れ滅裂の見解ならんや。再び完全を得るもの能く幾個ぞ。

〔日訳〕

徳山は誰に似ているか。まるで匈奴の地に攻め入った飛騎將軍のようだ。(以下引用) 漢の李広將軍は弓が得意で、皇帝から「飛騎將軍」に封ぜられた。後に匈奴を攻め、蕃人に捉えられてしまった。馬で運ばれているあいだ、

死んだふりをしていたが、途中まで行って薄目を開けると、監視人が弓矢を持っているのが見える。そこでバツと飛び上がり弓矢を奪うと、監視人を殺し、馬を奪って逃げだした。あとから追ってくる者もあつたが、李広に百発百中でつぎ倒されては、胆をつぶして退却してしまった。このオトコ、このような腕前があつて、死中に活を得たのである。(この一節はおそらく誤りであろう。)後に藍田で虎を射たところ、うんぬん。雪竇は頌の中にこの話を引き、徳山が再び入って瀉山に相見したことになぞらえている。ちょうど漢に帰りおさせた李広のように、徳山にも逃げ切られてしまった、というわけだ。

さあ、古人のかように見抜き、言葉にし、またそれを実践し、使いこなすさまは、まったく精彩を放っているではないか。人を殺して瞬またき一つしないような手並みがあつてこそ、たちどころに成仏し、自由自在となれるのだ。今どきの人の中には、問うてみれば、初めは禅僧の気概があるように見えて、一つ二つ探りを入れると、腰砕けの支離滅裂、まったく問答を続けられないという手合いもおる。だから昔の人は言うのだ、「続けることは大いに難しい」と。この徳山・瀉山を見よ、そんなちぐはぐな見解であろうものか。もう一度、身を全うして逃げ切れるものが、他にどれほどいよう。

〔注釈〕

○似飛騎將軍入虜庭……前漢の武将、李広が匈奴と戦つた際のお話。この部分は一夜本と張本で違いが大きい。一夜本は、即興的な引用の形を留めているのか、史書との違いが大きく、いっぽう張本はより史書に近い。李広を「飛騎將軍」とする典拠は不明。底本「筭」、大拙校訂本はそのままとする。底本で「筭」の左肩に単点があるのは、竹

かんむりを削除せよという符号か。本稿では「弄」に改める。「一箭一个」は一本の矢につき一人殺す、百発百中につきつぎ倒すこと。『史記』李將軍列伝、「其の後四歳、広は衛尉を以て將軍と爲り、雁門を出で匈奴を撃つ。匈奴は兵多く、広の軍を破敗し、広を生得す。单于、素より広の賢なるを聞き、令して曰く、李広を得ば必ず之を生致せよ、と。胡騎、広を得。広、時に傷つき病む。広を兩馬の間に置き、絡いて広を盛臥せしむ。行くこと十余里、広詳り死し、其の旁を睨るに、一胡兒の善馬に騎る有り。広暫かに騰りて胡兒の馬に上り、因りて兒を推し墮し、其の弓を取り、馬に鞭うち南に馳すること数十里、復た其の余軍を得、因りて引きて塞に入る。匈奴の捕者、騎数百、之を追う。広行くゆく胡兒の弓を取り、追騎を射殺し、故を以て脱するを得たり。……広の右北平に居るや、匈奴、之を聞き、号して漢の飛將軍と曰い、之を避くること数歳、敢て右北平に入らず。」（中華書局、二〇一三、三四五〇—三四五一頁）。

○此一説恐謬。後於藍田射虎云云。此一説恐謬。後於藍田射虎云云、張本に無し。「此一説恐謬」は後人の評語が混入したのか。李広の故事の引用が正確でないことを言ったものかもしれない。「後於藍田射虎云云」の故事もまた史書に見られるが、引用の意図は不明。『史記』李將軍列伝、「広出でて獵し、草中の石を見、虎と以為いて之を射るに、石に中りて鏃を没す。之を視るに石なり。因りて復た更に之を射るも、終に復た石に入ること能わず。」（中華書局、二〇一三、三四五二頁）。

○雪豆引在頌中、用比徳山再入相見、一似李広再得帰漢、依旧被它跳得出。雪竇が李広の故事を引用した意図を解釈する。徳山は、二度目に再び法堂に上がり瀉山と相見したが、李広將軍が漢に帰還したのと同じように、一度目と変わらず、うまく逃げ切った。「用比」、大拙校訂本は「用此」とし、上の句に連ねる。底本は判読困難。ここでは張本

に從つて「用比」ととる。「依旧」は前と同じように、相変わらず。

○看它古人見到說到、行到用不到、不妨英靈。古人は見て取ることができ、言葉で表すことができ、また実際に実践し、用いることができる。たいへんに英明だ。「到」は動詞の後に用い、目的に対する動作の到達・達成を表す。ここで「見」「説」と「行」「用」は対比的に用いられ、前者が知的な営為、後者が実践的な営為を表す。『頓悟要門』卷上、「問う、『経に不到、不到の法と云うは云何』」答う、『説き到るも行い到らざるを名づけて不到と為し、行い到るも説き到らざるを名づけて不到と為し、行説俱に到るを名づけて到到と為す。』（平野宗浄『頓悟要門』、筑摩書房、一九七〇、七一頁）。『従容録』第一〇則・頌評唱、「大抵講肆は説き到ることを貴び、宗門は用い到ることを貴ぶ。」（禪文化研究所、四七頁上）。

○看它徳山、瀉山如此。豈是滅裂見解。張本に「滅裂撃底」に作る。徳山、瀉山の見解は、問答を続けられなくなるような、支離滅裂なものではない。

【頌評唱三】

「急走過」、徳山便喝而出。似李広被捉去後設計奪弓、射殺監使番人子、而走出虜庭相似。雪豆到此、大有工夫。

徳山背却法堂、着草鞋便出去。道它得便宜、殊不知這老漢、依前不放過它在。雪豆便道：「不放過。」瀉山至晚問首座。瀉山幾時は放過來？ 不妨奇特。到這裏、雪豆為什广道：「孤峰頂上草裏坐。」又喝。你且道它意落在什广処？

更參三十年。

〔訓読〕

「急に走過す」、徳山便ち喝して出ず。李広の捉え去られし後、計はかりごとを設けて弓を奪い、監使の番人の子を射殺いころして、虜庭を走り出ずるが似ごとくに相似たり。雪竇此ここに到りて、大いに工夫有り。

徳山、法堂に背却せむけて、草鞋を着けて便ち出で去る。它かれ、便宜を得たりと道おもえるも、殊に知らず、這の老漢、依前として它を放過せず。雪竇便ち道く、「放過せず」と。瀉山、晩に至りて首座に問う。瀉山、幾時いづか是れ放過し来たらん。不妨はなはだ奇特なり。這裏ここに到りて、雪竇は什麼なんの為にか「孤峰頂上、草裏に坐す」と道う。又た喝す。你なんじ、且く道え、它かれの意は什麼いずくにか落在する。更に参ぜよ三十年。

〔日訳〕

「急ぎ走り去る」、徳山は一喝して出て行つた。ちようど、匈奴に捉えられた後、李広が一計によつて弓を奪い、監視役の番人の子を射殺して逃げたようなものだ。雪竇、ここに到つてはたいへんな腕前だ。

徳山は法堂に背を向け、わらじを履いて立ち去つた。うまくやったと思いきや、瀉山のオヤジ、やっぱり見逃しておらなんだ。だから雪竇は「見逃さず」と言う。夜になると瀉山は首座に徳山のことを尋ねた。やはり見逃してなどおらん。実に素晴らしい。さて、ここまで来て、雪竇はなぜ「孤高の山の頂で、胡坐をかいてふんぞり返るぞ」と言うのか。(ここでもまた一喝。) さあ、これはどういう意味か。もう三十年修行するがよい。

〔注釈〕

○射殺監使番人子_〓張本に「一箭射殺一箇番將」に作る。「番人子」の「子」は接尾辞とも解しうるが、上に引く『史記』李將軍列伝に「胡兒（えびすの子）」とするのにより、「子供」の意と取る。「兒」の接尾辞用法が唐代になつて確立することについては、蔣紹愚・曹広順主編『近代漢語語法史研究綜述』、商務印書館、二〇〇五、九五頁參照。

○道它得便宜、殊不知這老漢、依前不放過它在_〓徳山がうまいことをやったと思つたが、なんと、瀉山はやつぱり見逃していなかつた。「道」は「おもう」。「得便宜」は「もうける」「得をする」。『一夜碧巖』第五一則・本則評唱、「拳す、徳山鉢を托_さぐるに、雪峰、徳山に問う。山、無語。雪峰、便宜を得たりと將_お謂_もえるに、殊に知らず賊に著し了れるを。」（大拙校訂本、下四頁）

○更參三十年_〓更に三十年の修行をし、自ら見て取れ。『圓悟語録』卷一七、「若し道_いい得_ざれば、且_しく參_ぞぜよ三十年。」（T四七・七九三中）。『擊節録』第四二則・評唱、「諸人、還_はた会_はすや。且_く參_ぜよ三十年。悟_り去_る也_不定_ず。」（Z二一七・四八〇下）。

附記・

本稿は東京大学東洋文化研究所「中国禪語録の研究」研究班での会説の成果をまとめたものである。第四則は当初、研究会メンバーである橘千早氏が資料作成を担当し会説が行われた。その後、土屋が会説資料を基に草稿を作成し、研究会での討議を経て、最終稿をまとめた。以上の経緯から、文責は土屋に帰すものとする。訳注稿の発表にあ

たつては、研究班班長である東洋文化研究所馬場紀寿教授に多大なご支援をいただいた。また研究会での会読、原稿の作成にあたり、駒澤大学小川隆教授に多くのご指導をいただいた。本稿は内容の多くを研究会での討論に負っている。参加者各位に感謝の意を申し述べます。本研究はJSPS科研費17H00904の助成を受けたものである。